

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年十二月二十五日 印刷
昭和四十九年一月二日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五六〇号



No. 560

川柳ゆーもあ特集

一月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、八〇〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



国立公園 奥新和歌浦
・ 雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4



ゼニのないからっぽの頭で子守唄
仕事の鬼が変身出来ぬままの新春
老いて子に従い断絶そっとおく
倅せを拝むむばかり老の坂
摩天郎氏句碑建立
往き交う人にこのふるさとは語りかけ

中島生々庵

養生訓

すがすがしい新春を迎えるたびに、生き甲斐に似たものを感じる。健康でありたい長寿でありたい。これが私達の最大の欲望である。昨今のような都会生活では、何とかストレスを解消する方法を講じない限り、この欲望は叶えられそうもない。長生きの秘訣はないものか。食べもの事、睡眠の事、歩け歩けのこと等々数知れず養生訓があげられて居る所以である。しかし結局は「補薬のちからたのむべからず」という益軒の養生訓につきるようだ。「小児をそだつるは、三分の飢と

寒とを存すべしと、古人いへり。いふ意は、小児はすこしうやし、少しひやすべしとなり。小児にかぎらず大人亦かくの如くすべし……」。この少し飢やし、少し冷やすことは困難なことに或る程度耐えさせることが、健康体力づくり長寿の秘訣であるとの教えである。紙不足、印刷発送費の高騰といろいろ困難な時点に直面しても、「川柳塔」の体力づくりに養生訓を活かしてこの一年を送りたいと思う。

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

仮借なき生きる掟に身が縮む

福田 丁路

川柳塔新年号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

養生訓

中島生々庵 (1)

「女の一生より」

菊沢小松園 (2)

川柳初篇研究 (百二十六)

(26)

前田喜代人・故岡崎 重義・清 博美・藤井 和雄
川端 柳風・故高須唾三味・丸 十府・岡田 甫

新春感

中島生々庵 (22)

伊万里の虎

東野大八 (24)

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

北川春巢選 (30)

一分間の柳論

西尾 栞 (41)

秀句鑑賞 (同人吟)

川村好郎 (68)

年頭におもふ

西尾 栞 (28)

近 詠

高鷲亜鈍 (29)

近 詠

麻生葭乃 (20)

連作

「女の一生より」

菊沢 小松園

神様に叛いて女の子に生まれ
ままごとにならぬしの子供こそつかず
女の子が混じる通学大人しい
妙齡の蹴つまずいても見通さず
年頃の眉は殺気を追うかたち
娘ざかり旅の対手の名は言わず
唇の乾いて女先きに寝る
指揮者のない男と女の踊り
逆探知機をつけられてる女気が附かず
年頃の後ろ姿も脂切り
空腹になると女の媚めかし
温室に女ひとりの息づかい
おかめの面を女に持たす罰あたり
埴輪でも女の方から先きに見る
こけしでも女の方が手間が入り
泣きほくろ白粉のらぬ夜の膚
雁字搦めの果てに自分を削る女
乳房の谷間に顔充分に埋めさす
排卵期の女の刺に突き差さる
パンタロン子供寝かして脱ぎ捨てる
ある時の女は先きに鍵を掛け

川柳中山道六十九次：(11)……………富士野鞍馬…(38)
近詠……………諸家…(21)

笑いの要素「くり返し」……………北川春巢…(40)
諸家…(42)

川柳ゆーもあ特集……………板尾岳人…(50)

八木摩太郎句碑除幕式……………不二田一三夫…(27)

路郎先生の新年吟……………吉田水車…(51)

私のメモ……………本田恵二朗…(58)

初歩教室……………川村好郎選…(60)

大萬川柳「結末」……………(庸佑)…(64)

柳界展望……………大坂形水…(68)

本社十二月句会……………林瑞枝選…(56)

各地柳壇(佳句地10選)……………宮川珠笑選…(56)

一路集「虎」……………水粉千翁選…(57)

「日の丸」……………(二三夫・葉子)…(71)

編集後記……………

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

肉親に抱かれ勲章ひとりごと

和田 維久子



技巧が過ぎて黄色い太陽
妻らしく女らしくへ夜を拗ねる
柔肌の女ざかりの名に恥じず
初めから欺すつもりは無い女
つきつめた女の瞳に射抜かれる
傷だらけ心の傷は顔に出ず
泣いている女に鬼の影は無い
つけ眉毛欺す気はない伏目勝ち
借金とつわりが同居してた頃
舌の先きから女は炎えるものを持ち
絵になれば邪恋が冴える美しさ
案の条女が先きに声を上げ
中年の悩みを女の言葉尻
泣いても後ろ姿を整える
停年の無い妻の位置に慣れ
才女でも孔雀の羽根は似合ない
埋み火のなお燃上るときを待ち
火遊びが過ぎて女は珠数を持ち
死んでからの姿を女のエゴが言う
白髪染ぐらいで男とめられず
句まで抜けた女と差し向い
入歯ではあわれキッスも災えて来ず
老人ホームの三角関係絵にならず
音もなく老女は消えてゆくさだめ
白骨になっても女底光り

(完)



若本多久志選

昭和四十九年新春(二句)

高槻市 福田 丁路

新春を羽織袴で見直され

次期社長狙う内ゲバ静かなり

日本が人の重みで沈みかけ

サイレンも風も凍って月が冴え

十字架を背負い師走の道遠し

青森市 工藤 甲吉

菊花芳香古い日本をなつかしむ

人民の目に役人はひま過ぎる

天と地の間に余る五尺の身

ぞうり取り型で社長の目にかない

ゴキブリも生きねばならぬ夜が来る

西宮市 島居 百酒

父の忌に律義な逸話を肴にし

ほどほどに飲んで天寿へ自信もち

断崖で揺れるを風の姿と見

多情多恨哀歎空しく点滅し

心眼は有るとしとこう夢を見る

大阪市 神谷 凡九郎

祝 古方先生御子息御結婚

また新芽綺麗な花を夢に持つ

悼 葵水さん

おかあさん声とどきそな距離で追い

生甲斐と女は苦勞をそう呼んだ

日の丸を振る振る異邦に住む心

自己喪失 一瞬そこに人間味

大阪市 中川 滋雀

娘を偲ぶ

三回忌想い新たな墓に佇ち

初雪がきた故里と電話口

一年をまたふり出しの馬齢よむ

尾燈小さくいつかは会える思慕をのせ

元祿の驕りへ石油が水を差し

島根県 堀江芳子

子ら想う寝返り夜が動かない

血圧へ話そらして雲を追う

夫婦愛老い知りそめてなお深し

騙されてみよう若さの欲しい肌

距離おいて心の戻る日を折り

神戸市 仲 どんたく

秋独りポレロの曲が煽情す

かたくなに薪で飯炊く母たっしや

明治節を譲らず父の文化の日

にんにくに叱咤激励される年

緞帳の上がるがごとく女脱ぎ

大阪市 西 出一栄

物価暴騰天高けれど肥えられず

柿をもぐ子銀杏落す子秋の彩

ごきぶりの動作鈍って秋深む

髪形へ妥協をしない顔の皺

太閤園にて

金婚を祝われて功無きを恥ず

神戸市 小浜 牧 人

垂井葵水氏 (一句)

秋寒し伏虎の城へ陽が落ちる

歩道橋過去は跡方なく流れ

庭へ来る雀に倅を分けてやり

アルサロの女餃子の匂いする

風は尾花に秋の別れを告げて去る

鳥取県 鈴木 村 諷子

人生の喜怒哀楽へ虹の橋

孫よりも嘘をつかない猫が好き

沈黙のかげに心の鯨舌が

うるこ手に村はひねもすいわし漁

以心伝心もう金婚も間近かなり

東大阪市 宮 西 弥 生

身を飾る言葉の中にある虚勢

男と女知恵の輪に似て交わらず

はなやかに咲けぬ野菊のきれいすぎ

コンパクト女武装解きし手に

飾らない言葉で裏町黄昏れる

松江市 中 川 晃 男

手をそれたまり木犀の香を散らす

褒められずともよし 深山に紅葉燃ゆ

生きている 生かされている 息を吸う

相合傘いたわり合うた肩が濡れ

青年静かに低く革命を論ず

大阪市 川 口 弘 生

願生院文空葵水とは哀し

にぎやかな人だったから淋しすぎ

一陣の風詩人もう唱わない

見えぬとこ結ばれている夫婦岩

おばあさん死んだのにいつもの鳩が来る

大阪形水

声帯模写そっくり田中さんしゃべる
したいことしてる男を羨みぬ

かに食いに来いと米子の得意先

ことここに来ては潔癖言うとなれず

見通しの暗い今年へ賭けてみる

大阪市 橋 高 薫 風

隱健を徳となすなり福寿草

パンダから虎へ世相も変りゆく

日の高さ悪事悪事とならぬなり

のけぞって見えた師走の青い空

公約の阿呆も休み休み云え

大阪市 不二田 一三夫

雪空のバスへ四五人会葬者

切れた糸つなぎ合わせた人生か

宝石店おんなのドラマならべたて

寄 席

わが町内の一輪亭花嫁師死去(48・11・24)

しゃべくりの台本閉じてひそと逝き

川柳と花蝶のコンビも法善寺

出雲市 尼 緑之助

十二月和服の男にも出合い

老醜の蔭影濃く夫婦ひそと住む

あほらしい対話 団交に聴く時計

負けた氣に包まれながら協定書

岡山県 浜 田 久米雄

上る上る凧も上ったお正月

賀状来ぬ人を案じて松の内

三寒の日へ運悪く行き合わせ

信念は厳然として古稀の皺

岸和田市 高 橋 操 子

ひれ酒の頬がほめ合う寒の月

ちよっぴりのこわさ消し飛ぶ寒のふぐ

嵐山もみじも橋も絵ではなし

くしゃみ一つコマーシャルのようのにむ薬

倉敷市 本 田 恵二朗

嫁かせても妻の背の荷まだ重い

ザボン青く太ってわが城秋にする

そろそろ散ろうかとわくら葉の対話

友の墓碑に彫らる

安らかな眠りへ四季の風の詩 大阪市 正 本 水 客

秋草の花の手招き見てあきず

足もとも頭上も重たげな黄色の葉

谷の斜面が異様にかがいている紅葉

淋しいんだなあ木の葉も風に耐えている

高槻市 若 柳 潮 花

くれないに一夜の恋を盛るグラス

龍神温泉へ

溪くだる水に紅葉が巻き込まれ
虎ヶ峯山かさなりて秋動く
すずきの穂峠の風にさからわず

尼崎市 黒川紫香

世を捨てた気軽さなんでも聞いてくれ
指先の隣りは霧がかかる山

龍神への道

奇絶峽人影もなく磨崖仏
秋も去め落葉竜神の湯がこぼれ

大阪市 吉田圭井堂

土地売って仏間もとらぬ家を建て
記念樹の丘で歩止り踏んでみる
古稀過ぎてなお初春に湧く斗志
古稀過ぎていてもそわそわお元日

宝塚市 傍島静馬

貸借が無くて友情恙なし
総入歯ゆっくり食べてるわけでなし
洗濯好きの妻に着ごろを脱がされる
べからずの芝生デートに冒される

兵庫県 小西無鬼

コオロギが鳴き鈴虫も鳴き詩が生まれ
風林火山嗚呼我若ければ若ければ
孫がはやガールフレンド持ちそうな
ちよっと出た食欲看護を喜ばせ

香川県 三井酔夢

時雨来て虹の雫に身を焦す
生きていてよかった虹へひとりごと
近寄れば消えるあなたを虹に見た
肉眼を閉じれば虹は彩を増し

大阪市 本多柳志

おふくろの味をホテルへ喰べに行き
国歌斉唱して童心の胸あつし
紅白の余韻の中の除夜の鐘
ばんざい三唱して往年の覇気でなし

門真市 福島鉄児

助手席の子に信号を注意され
金持って趣味なき人を哀れとも
ゆるすしかない結婚へ眼をつむり
百グラムの価値 松茸に教えられ

藤井寺市 西いわを

六白金星古稀へ春迎う
流行の沓どう変ろうと足の型
出勤も出張も鞆一つ提げ
追想か未だ青春の脂粉嗅ぐ

島根県 藤井明朗

人生の起伏しみじみ妻も老い
ユックリズム物の不足に動じない
燃料異変木炭へ目をつける
ひと事でない節約の計を立て

岡山県 浜野奇童

ウナ電へ馳せる夜汽車の窓が荒れ
一駅を歩く家出の荷が重い
みんな出る釘に思えて課長補佐
冷静な波紋だまって消えていく

倉敷市 水粉 千翁

甲寅の春

ふん張って虎は平和をゆずらない
信じた日まで救いの手を洗う
背かれてわたしを責めることばかり
また破るつくろう母と子は信じ

大阪市 山川 阿茶

散り際を楓は紅で化粧する
呆けられる結構な身分じゃござんせぬ
フリーセックスそと出は堅固なパンタロン
たかがお酒ぐらいに理性をぐらつかせ

倉敷市 小野 克枝

木職の寿司が妻には嬉しくて
良心の叫び夕焼雲は朱
子には子の道あり首を縦に振る
チリ紙の話題に地球混乱し

倉吉市 奥谷 弘朗

腹の立つ物価無策の文化の日
革新も柄と色合いみな違い
帰宅して日めくり入院前のまま
倅せを逃さぬ夢をまだ捨てず

美しく白骨体をさらしたし
手ざわりの心眼石の裏おもて
念の押し場で教養さはかられる
念が届いて物が副わない
愛媛県 渡辺 曉童

アドバルン機嫌そこねて横にのび
秋の月さやけく心の底のぞく
下駄を履く暮らし愛して世をなげき
銀杏の実拾い幼い恋に似る
今治市 越智 一水

お話しがあるのと妻に座らされ
方言に溶け込み浮草根をおろす
先生と呼べずおしたい申し上げ
マネキンと背くらべだれも見えていない
竹原市 山内 静水

沈黙考うっかり躰出た疲れ
働いて喰えぬ時代にまた出合い
仏壇はおあきでしようが今日も菊
関門架橋完成試歩会に参加
関門橋静かに揺れる県境
下関市 石川 侃流洞

何万年過去と未来へ舍利こうべ
犯人は迷宮頼るは犬の鼻
流行の嬰兒殺しへ犬は無事
大阪市 福井 野迷路

赤旗をなぜ左手で振らないか

桜井市 岩本雀踊子

父と子の暮しに他人様がいる

人生の暮色背がチトまるく

曲りまずゆれますバスはつかれぎみ

いつにない無口の父に遠く座す

倉敷市 小幡里風

佐渡ヶ島回遊

潮騒へロイヤルホテルの夜が長い

本当にされ冗談が恐くなり

ハイミスの強気条件崩さない

背信のその日の海が荒れている

兵庫県 遠山可住

日曜日の栗マニキュアの指にふれ

インフレのそとで芝栗ひそと落ち

経験がとんと通じぬ孫といふ

爪を切る音もとよりじみて来る

大阪市 天正千梢

はかなくかなしい幸福をかみしめる

数学の世界で無限を理解する

価値基準乱れまいとする

小出智子さんへ

精進の足跡二回の賞を抱き

岡山県 池田古心

交渉へ短気不安を抱きながら

インフレに踏みこたえようなし軽量級

樹の下に屋根あり家も古びたり

口癖の世話になる娘は寄りつかず

姫路市 梅谿庵 不酔

さすが秋 蠅も一飛びして休み

千鳥足勝って来るぞと勇ましく

会費だけ飲めと女房抜目なし

迷うてる俺にもほしい道しるべ

和歌山市 野村 太茂津

葵水追悼

朝霧の彼方へ慟哭果てし無き

山紅葉散るな痛恨限り無き

痛烈に弔吟批判に化けて出る

詩を遺す道連れがある永い旅

大阪市 有信 新之助

方便の嘘も揃えて五十歳

人生に開き直る酒の夜も

新柄を着て保護色の夜の蝶

土曜日がひまになっても食えてゆき

東大阪市 久米 奈良子

ついて来いと云うには何か欠けたひと

いつまでも待つと縁談乗り気なし

糸屑をとって行きずり会釈する

和訳して文続くなり冬ぬくし
富田林市 板尾岳人

今年又山の朝から年明けの
除夜の鐘出番まつてる御来迎
雪けて山の峰から御来迎
山小屋の朝を樹氷に起される

倉敷市 野 田 素身郎

煮え切らぬ返事でひとまず切り抜ける
時間もてあまし易者の灯に坐り
菊日和残念ながら持病が出
親友の祝辞嬉しい国訛

大阪市 江 城 修 史

嫻々と過去の足跡追う女
故里は嶮に生きて五十年
風に舞う枯葉が老いをせき立てる
一言が多く孤独の中に住み

岡山県 嘉 数 千代香

初春の夢が抜がる画布の無垢
悪かったと気付く日過去をかくさない
氷雨きびしく自信なくした背を叩く
抱く石の重さに耐えている歩巾

京都市 都 倉 求 芽

書きあげて満ちた心に墨匂う
三面鏡やっとスプレーまで漕ぎつける
最後の葉散り終らせた日から冬
非番の日朝日が僕を慰める

奈良市 宮 口 笛 生

気の弱い自分を知った一人旅
温泉と蟹に決った冬の旅
旅疲れ知らず句帳を埋める旅
国なまり農協さんと乗り合わせ

枚方市 宮 川 珠 笑

パニックのニュース聞きつつ障子帖る
古寺訪うて秋の一日満ち足りる
廻廊を大またに往く案内僧
ローンまだ残る新居に柿を干す

柏原市 大 峠 可 動

鐘は詩なり合掌の庭にくる
真実を掴み合って涙がたまる
花びらが散って柘榴一個が火となれり
夕焼に染まり少年母を追う

出雲市 原 独 仙

用便も以心伝心連れの旅
子も菊も上手に造り隠居なる
ピーポーが夕餉の箸を止めさせる
酒癖が彼の芸だよ忘年会

姫路市 大 江 秋 月

紙コップペしゃんこ団体さんが降り
紋切型で終わった司会者にも拍手
北国の便りを屋根に貨車が着き

苔寺にて

茜色に彩えて紅葉の西芳寺

平田市 久 家 代 仕 男

番犬をつなぎ日稼ぎ家を空け
ピーポーピーポーの馴れ恐しきニヒル
千円で日増に軽き市場籠
旅商のメモ帖駅弁の味も記し

竹原市 森井菁居

天職あれこれ(三句)

奥さんと話しておれぬ職を持ち
団地まで来て似たような家ばかり
夢を売る自負に清貧支えられ

母校百年誌の題字揮毫す

記念誌の表紙を飾る趣味を持ち

岡山市 川端柳子

悲しみは抱かずお月様にあげ
お天氣がよいから靴よどこへ向く
律義者明日の手綱をしかと持ち
家計簿のその素直さに音をあげる

泉大津市 村上春巳

正直な男のうそが鼻に汗
松茸も食わずうかうか秋がすぎ
トラトラトラ石油戦争の新春が来る

中山寺

手を合わず爪の赤さも若いママ

笠岡市 高木桃里

枯野から浄土への道見つけたり
日銭やっと足りる母子へ陽が落ちる

古城跡の何処かで武具の音がする
露がこぼれて蓮が科しなつくり変え

京都市 松川杜的

箏曲の会に

調絃のリズムへ開幕待つゆとり
盲目でよし金屏風に恥じぬ芸

(聖護院)

流水をささやくように秋落葉
老夫婦古寺の歴史の如く座す

八尾市 香川酔々

陳情を聞く稲刈を知らない掌

ふるさとの絆 秋刀魚を焼く匂い

仇野に色なし有るは石の色

柿・ざくろ熟れて鳥に語りかけ

八尾市 高杉鬼遊

悼垂井葵水君(一句)

絶叫を吸い込んで秋の天

落葉ふむ墮ちる女の詩をきく

お伽ばなしの幼ない恋が遠い絵に

豆腐なら切れる男のつけ焼刃

大阪市 金井文秋

長髪へ理容師むしず走るなり

恋人が出来て本気で貯めはじめ

飲まずとも金は貯まらぬように出来

ささやかな抵抗チリ紙買いだめる

大阪市 小出智子

女であることに今朝も紅を引く

戸惑える身を聖堂の前に佇ち

中年や父に優しくならうとす

別離

木犀匂う母を惜みし日もありし

大阪市 河野君子

薔薇の棘ばかりが目立つ日の憎悪

目の奥で母像を昇華する忌日

球根のまんまで終る性哀し

買いだめて冷たきものを背に溜める

大阪市 柳原静香

散ってさえ木の葉は燃える彩をもち

求人欄へ心が動く物値高

聴えない哀しさ同窓会へ「欠」と書く

飲めるならやけ酒飲みたい日もありて

松江市 柳楽鶴丸

国引のように関門橋が出来

鋼鉄の芸術関門橋へ夕映える

可憐な変身恋をした娘

顔で笑っても母はだまされず

岸和田市 福浦勝晴

盛り場の風もなまめく三カ日

黄昏の孤独だ海へ捨てて行く

貝殻の町を朝たつ日の旅愁

書割りの明治に浜町火がともる

鳥取県 清水一保

もう少し地球よ自転ゆっくりと

稲刈りを終って

刈り終って心の奥で聞く時雨

激論に勝ってビールを苦がく飲み

積んで置く本へ給料惜しみなく

米子市 林瑞枝

三猿の教え女性のすきをつく

両親の愛お返しも無くて老い

恋う程の甘さ傷口には触れず

幾山河疲れを見せぬ紅を刷き

米子市 八木千代

目も耳もたしか米寿の糠袋

三枚目子にはきびしい躰けする

プランクを埋めたい足がからを踏み

掌のくぼにちいさい夢が降りたがり

富田林市 岩田美代

先方が燃えてくれぬと言う結論

栗活けてほほ笑む貌に隙がない

此の人もうなずく事を知らぬ貌

仇野念仏寺にて

仇野へ秋の深さを濡れてくる

富田林市 木村弥栄子

さけられぬ火の粉のかかる距離にいる

泥水を呑んできれいに咲いている
傷跡が私を素直にしてくれず
ときつける櫛へ炎はさめやらず

大阪市 児島 与呂志

云い訳ですらりと抜ける酔い加減

口笛が合図娘がそわそわし

秋ふかしカットグラスの琥珀色

凡人のまま夫婦よく寝てよく食べる

水見市 関 美子

無い袖を子に振り夫婦寝正月

くるくると唯くると母の四季

白い世辞赤い嘘延々披露宴続く

名無し草なりに咲きたい欲を持ち

大田市 藤田 軒太楼

紫煙の輪うつろに決断まだつかず

造花の悲哀色褪せても散れず

相談役まこと体よい使いすて

三猿の訓え昭和でゆがめられ

東大阪市 竹中 肖二

体験の匂が生きていて拾われる

手を振って別れる方へ流れ星

同棲の絆はこうも脆いもの

予期しない渋滞に会うバスツアー

東大阪市 竹中 綾女

礼所への紅葉の褥踏むに惜し

五百羅漢並び淋しさ堪えている
爛ざまし卯酒にして父の風邪
不可解な女の性が劇となり

松江市 小林 孤呂二

電気刺今日をプラスにせよと鳴る

晩秋の淋しきひとり寝酒する

老父ありて欠せないもの暦買う

総理にもあるどうにもならぬ時の顔

広島県 高橋 鬼焼

明日逢える笑顔で言えるさようなら

振りむけば母の涙が光ってた

ネオンとの対話財布をたしかめる

さよならへ答のほしい発車ベル

宇部市 平田 実男

豊作がやはり嬉しい二反五畝

自家用の方へは農薬ちよっと撒き

池の鯉彼岸を知っている動き

駄句賞めるセールの手へ乗ってやり

大阪市 今西 章雅

遠くなり行く耳を意識し耳掃除

うっちゃっておけとその癖気にしてる

インフレ対策子の正論へ付いてけず

色即是色まだばら色の齢である

島根県 堀江 正朗

指触れて確かめるより菊の香の

そうだねと笑っただけのたのもしさ
みんな寝てねずみと僕と二人きり
見守ってもらう暮らしのなかの杖

尼崎市 高津徹也

初鏡 鏡に正座する心
女にも深入りしたい夜があり
赤子泣く声ひりひりと冬しげく
童に与う乳房に母の位置確か

大阪市 室谷徹舟

健康でああ素晴らしい飯の味
定年へ牛でなかった事の幸
一日の武装を解いて湯に浸り
一言が多くて貝になる努力

西宮市 藤村 女

父母へおくるみかんの粒をより
歯刷牙の柄の七色も子沢山
一年が倅せだった除夜の鐘
健やかな顔が揃った元旦の膳

小松市 馬場魚山

人工の乳へ忘れた子守唄
実の子と思えぬ言葉身をきざみ
赤い羽根から年賀ハガキへ秋深む
三回忌温泉行の話も出

倉敷市 藤井春日

その点は弁えホステス志願する

中陰を済ませて寡婦に灯がともり
手鏡の割れて物憂い日が続き
余命なき妻喜ばず嘘もつき

松江市 恒松 町紅

大山の紅葉へ何故にサンガラス
過疎の村煙は空へ一直線
穴道湖の夕陽神話の色となり
或る日妻明るい唄を口ずさみ

大阪市 河井庸佑

三度めの無心が通る友があり
月明り無気味に浮ぶ夫婦岩
かけひきに負けたと今頃わかりかけ
損をして得とる策を身につける

倉敷市 能登原 白水

一生の計に恥じない汗を拭く
雑草の一人太陽にはじす
絶叫の姿で蛙木に刺され
如露とれば菊が輪台から媚びる

守口市 羽原静歩

夫婦岩ほのぼの明けて伊勢の初春
ボヘミアンの雲が崩れて詩になり
プランコよ父の自画像越えて行け
冬の息白く白く心経を読む

大阪市 河股緑水

ためらいがあって手練の矢が外れ

湯豆腐のくつくつたぎっている平和
ビルなんぼ建っても空はまだ広い
諦めがいつか男を石にする

新宮市 大矢十郎

葵水先生の急逝を悼む

訃報聞くしばらく闇に吸い込まれ
胸えぐる訃報重なる秋悲し
記念写真よよと還らぬ人を恋う
淋しさに柳誌開いて葵水の句

大阪市 西川誓二

年賀はがき買うて師走へ指を繰り
無明なればこそみ仏の灯を求め
詩囊に師の香漂う句のことば

娘の婚約

娘の網は好青年を掬い上げ

岡山県 出原敬一

天ひくく黒の水引ふところに
ご好意の傘の雫は冬を告げ
間近なる妊婦吐息で今も暮
後姿は顔より老けた歩きよう

松原市 玉置重人

一言の溝が中々埋まらない
食い違う心に悲しい風の音
頬染めて少年老婆にゆずる席

勤統二十年表彰状

勤統二十年紙一枚に認められ

島根県 小砂白汀

泣くところで泣かぬ女でも足らず
スネかじる身だジーンパンがふさわしい
鈴虫の骸じ茄子を喰い残し
神さまも違反しなざる返えり咲き

兵庫県 河原みのる

北海道とところどころ

ピリカメノコ颯爽と行くパンタロン
観光用アイヌアイヌ語を習い
チュウレイ島マリモは何ンにも語らない
見下ろして拝む気になる摩周湖よ

堺市 伏見茂美

赤ワイン舌で遊ばす秋の女
口げんか母娘の愛は派手にやり
別離した親子に風の便り欲し
太陽の温もりへ遅々と犬の位置

島根県 榎原秀子

丘はるか海は別れた人のこす
恋の歌うたえぬ酒のほろ苦さ
ミシン踏む秋の深さがしのびより
今昔をいわず柿の朱陽に映える

岸和田市 葛城伊三郎

親の気も知らずにいどむ山男
買い溜めて置き場に困る紙の高

成長をして金だけの人心
もうこれでよいかよいかと味噌を摺り

竹原市 小島蘭幸

生後三カ月をむごい手術室

生き抜けよ今日から俺の血が混じる

ポケットに硬貨がひとつ淋し秋

お金を貸せと男に主義がない

倉敷市 松下梁水

ハッピーニューイヤヤーやっぱり母が先に起き

一片の義理へ微笑が歪んでる

宿命と悟ればわいてくる余裕

人生の重荷忘れている屋台

貝塚市 野坂つき子

陽の恵み少いとこで良く稼ぎ

失ったものは尊くみえてくる

ブランコにゆられ幼女になっていた

真夜中の落葉風も無い庭で

倉吉市 渡辺菅句

眼のふちを真黒にマダム夜を生きる

イブニングドレス靖国へ七五三

時刻表繰って気ままな旅の夢

選挙カーに乗って候補者の顔でいる

三重県 川上大輪

共稼ぎ妻は三つの顔を持ち

愛の鐘夫婦でついて嘘がない

嘘ひとつ吐いて人間臭くなる

悼 莫水先生

雲流る恩師の影を見失ない

大東市 土岐トク子

晴れの日に向う車窓の銀閣寺

昇る陽あり沈む陽あり人の世の

息子の昇段祝う

大将戦ですヨと遺影高く抱き

お胴ノ決った一瞬遺影も乗り出して

呉市 榎田英詩

新年一句

虎の眼にバトンを持った牛のろし

尽くされてみたいと思う日の驕り

未練断つ男の酒が苦すぎる

保護色に溶け甚六となる長子

鳥取市 両川洋々

悔すこし抱いて羽田の灯と別れ

七癖の中のひとつが鼻につき

しぶしぶと酒断つ夜の胃が痛み

砂丘にて

アベックへ晶子も踏んだ砂が鳴り

富田林市 和田維久子

恙がなく渡った橋を振り返える

古城脱出八階の灯に埋もれ

嬉しさと寂しさを持つ娘の秘密

人妻を奪わん程の愛語聞く

堺市 高橋 千万子

一日のつかれふとんが吸うてくれ

ポイントはないさコンニャク男なり

朝がえりつづく夫へ仮病する

叱られた犬悪かった顔をする

豊中市 戸田 古方

女しかできぬ喧嘩を女する

ピュリタンにも限度があったなとわかり

雀が大揺れさせたコスモス

岡山県 直原 七面山

チリリンリンと鈴の音も秋

風に舞い落つ蟬の抜けがら

劇的に結婚劇的に別れ

名古屋市 吉田 水車

明治者の笑いにうつろあるばかり

七代目尾上菊五郎

おしろいを落せばしばし菊之助

どちらかが折れて平和な日がつづき

大阪市 木村 水洞

公害に耐えて雑草生きつづけ

運だけで天下は取れぬ太閤記

笠岡市 木山 遠二

柳友凡美女を悼む

薄命の君に命のある句多多

池の辺を歩めば君に逢えそうな

葬列は遅遅涙雨蕭条と

呉市 林野 甞光

愛の手が支えて軽い車椅子

タレントの運 捨てる神拾う神

朝のない男よごれた爪が伸び

松江市 岡崎 祥月

城を去る今宵最後の猪口を持つ

人生のドラマの中の妻と俺

友情の和と和を結ぶ糸となる

唐津市 新岡 回天子

稲刈は知らぬでも良い女の子

頼りない息子から来た嫁のこと

身つくりいしてからよりそう紅雀

松江市 舟木 与根一

抜てきが実力以上で胃をこわし

入れ歯がくがく叙勲のよろこびよ

性教育雌しべ雄しべの域を越し

松江市 吉岡 通児

退職・美術商として出発

割切って脱サラという境に入る

先行きも右も左もみな新た

早退欠勤すべては己がすねの鎌

伊丹市 小川 静観堂

駅弁のお茶も五〇%値上げされ
知らぬ間に茶のみの友となつたいま
円周をぐるぐる馳けた恋だった

広島市 山田 季 賛

明日が有る晩酌の酒を賞め
妻の愚痴今夜も聞く物価高
横車押すのが一人まとまらず

大阪市 宮 尾 あいき

折角のみなみで飲めぬ連れという
巫子さんと花嫁さんは同い年
夫の墓碑せめて私の名を添わせ

竹原市 時 広 一 路

媚売らぬ花の生命は短かすぎ
天と地の空間人生揺れ動く
米粒が新米ですよと語りかけ

八尾市 大 路 美 幸

垂井葵水兄へ捧ぐ(84・11・2)
今にして最後を飾る八尾の選
はかなさは友のむくろへ掌を合わせ
白菊に囲まれ友の安かれよ

橿原市 岩 井 本 蔭 椿

物乞いの横顔亡母に似て悲し
腕組んだままでは通さぬ水溜り
稲刈りの傍までダンブ土を盛り

倉敷市 谷 井 扇 水

偶然に強い男に知恵を借り
文化とは不便信号ばかり増え
騙されて人生観を立て直し

鳥取県 森 田 布 堂

素晴らしき落葉カラーの地図があり
合併に母校も土地も売られたり
親類の訃報は夢のことにふれ

生駒市 草 深 醉 升

まっすぐに此処まで生きて来た誇り
億と言う金でなければ驚かず
たまらないほどの早さで今日も暮れ

倉敷市 竹 内 翁 童

義理人情欠いて念願のマイホーム
あきらめてみれば左遷の地に人情
陸橋に反抗一人車縫う

愛媛県 村 上 旭 童

冬が来るらしい音して風が過ぎ
標準語だけで話せぬ故里の味
又赤字らしい密柑へ澄んだ空

鳥取県 谷 無 閑

五黄の寅まだまだ迷信つきまとい
聞く鳥で見る鳥でないホトトギス
食欲の秋だ自炊にまで揃えて

大阪市 飛 田 好 一

肉身の絆が距離を手繰りよせ

風あたり真ともに受けた日の不運
駅弁を舌に残して旅の味

堺市 藤井 一二三

胃のカメラ一緒に臆病まで写し
捨て犬の惨めは小石までも避け
磨きさえすればと參觀気を持たせ

富田林市 浅川 八郎

寝たきりの夢は句会へ足軽い
老僧の木魚の響き静に寂
一人旅弥陀の指す道一筋に

大阪市 神田 秀峰

貸す方が揉み手で印を貰ろている
軍艦マーチ聞き度くパチンコ日参し
イイ月ネ妻御機嫌のポーナス日

八尾市 古川 鶴声

十二月ともかく爪に灯をともし
公書を知らぬ過疎地の値が上がり
収賄の汚職のからむ杭を打ち

大阪市 藤田 頂留子

大根の値サンマ哀しや目にしみる
食欲を悪役にして又太る
カーシャット電車で京へおこしやす

島根県 中島 英子

エンジンの音に育って海に生き
婚約へ二の足をふむ恋芽生え

この人となら落ちてても悔いぬ空の旅

東大阪市 齊藤 三十四

お酒が好きでアルサロに出ています
有難度う素直に言える子に育て
軽井沢テニスコートも見て通り

米子市 増田 竹馬

五体快調ヘルスメーターで念を押し
当分は客用で寝る新家庭
セックスに少しは触れてインタビュ

大阪市 津守 柳信

口八丁手がともなわぬ更年期
消燈を待っていたよに頭冴え
現在を生きる自信が過去を捨て

松山市 谷 のぶお

国防色と言えば判らぬ女店員
片えくぼ出来たあたりの深い皺
迷子放送聞いている孫の手をひいて

北川 春 巢

長男結婚披露(四八・一一・一〇)

暦など気にせぬきょうのお目出度さ
新郎新婦前から後から撮られ
色直しの間新郎を看にし

ビールのように吉日のジュース飲む
肩の荷が下りてこっちも若返り

川村 好 郎

着せて貰うオーバーに気がひけて

つれづれの旅でも定まる夫婦の座

枯葉散る散るわれ世を去りて何残す

調節が狂ったらしい共稼ぎ

気負っても枯野とぼつく旅人か

西尾 梨

アルバイトに牛乳一本出る仕事

約束をとぼける芸を社長もち

栖鳳の雀一羽の値のすごさ

鵲の贅蛙泳ぎのまま蛙

能登にて

ひたひたと枕に潮のひびきかな

菊 沢 小松園

考えることやめにした回転木馬

月に鳴く虫と人間思い込み

時計止まったのを気がついている二人

日本が目立つ日本で出来た世界地図

鬼ひとで海洋博は知らされず

若 本 多久志

G・N・P 驕る平家の末路かな

比類なき名曲として除夜の鐘

新聞の訃報は齢を先ず調べ

鱈ちりの味なつかしき雪だより

越路の便り甘えびの味にふれ

詠

近

百八の鐘にうらみの残る朝

帳尻のあわぬ政府へ除夜の鐘

除夜の鐘ヒッピーの空素通りす

やどかりに宿なき浜へ射す初日

屠蘇うましああ煩惱即菩提

酒ひかる酔うてよかるか鬼子の血

一里塚六趣は霞む田舎道

乃 菫 生 麻

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

酒やめてまで長生きを考えず

岐阜市 市川 鱈 魚

落葉焚くくすぶり霧に囲まれる

かたくなな信念貧しさつきまとい

癖のある酒へ返盃遠ざかり

うれしいねえ箸箱の艶まだ揃い

肥柄子故郷に用の無い一つ

旧憲法我家は父の吹くラッパ

値上げして新聞物価へもの申し

東京都 池口 呑 歩

インフレじゃない言い訳がたよりない

買締めと闇と歴史は繰り返す

ここでまた大吉うれし旅続く

新聞に所詮御都合主義のペン

新聞がつくる新聞社の正義

泣いて頼んで神様を困らせる

枝落とす季節街路樹涙ぐみ

香具師仲間では兵卒の綿菓子屋

今治市 長野 文 庫

今治市 月 原 宵 明

冬山の翳に思索が突き当る

旭八の埃払って自嘲する

休戦という口約束のお元日

元旦に酔えば人生は無碍

元旦の疲れ具合の三カ日

元旦だどう過ごそうと昼と晩だけ

初詣三十の息子に嫁のきてがあるように

永劫の石で磨かむ虎の爪

更新をする毎日がいのちがけ

真実の声がなかなか掴めない

だし抜けに声かけられて絶句する僕

年頭におもろ

高鷺 亜 鈍

ありがたし更な朝に手を合し

元日という一日を無事に越す

平日と交り榮えせぬ暗いお元日

なにもかも丸呑込みのお元日

贈る味の灘一



金露

清酒 キンロ



新春感

中島生々庵

謹んで新年の御慶申し上げます

「川柳塔」も今年は第九回目の新年を迎えたわけだが、年頭所感というものは大同小異あれを憶い、これを惟うと、よくぞここまで辿りついたもの哉と懐古の念と、ことしこそはと中学生式の発憤に似たものが去来する。

四五年前の正月にはソ連の宇宙船が月を回って帰って来たとか、アメリカの三人乗り人間衛星が地球を一六三回回って帰って来たとか日本では大学紛争で必臓が凍えるニュウス、さて今年はどうな出来事が起るだろうと、いささかおよび腰で将来を占ったりしたものだ。それがもう昨今では月の世界の情報でも北海道で団体でもやってる位にか関心をひかないし、大学カンパスの血闘でも、新聞記事で又やっとなるなあ位の程度になって終った。テンポの早い地球の回転の中に起る世の中の騒々しさと混乱さのせいだろうとも思うが、私達のこの馴れによる不感症は、これでいいものだろうか、考えて見ると恐ろし

頌春

同人吟選者

若本多久志

中島生々庵

西尾 葉

い気もする。「こんな時えらい坊主も出んかいな」としみじみ豆秋の句を思い出す。

ことしは寅歳、寅歳といえは徳川家康が四百年余前に生れた天文十一年も寅歳であった。当時も風雲急で人心不安な時代であったろうが、一年の計は元旦にあり等と多少ゆとりある屠蘇の味に酔えもしたろう。私達の寅歳の元旦は電子計算機をたよりにしてゆくとして、も心もとない極みである。せめて各自が信じ合い励まし合い、背伸びしそうなあせりを、戒めながら他面将来への夢は力強くつみ重ね、一年は一年と輝きを増してゆく「川柳塔」の灯をはぐくみ見守ってゆく外はない。

人類だけでなくすべての生物が世界から絶滅する時が遠くない将来に迫って居ると観測する学者もあるときくが、もしもそうであるならそうであるだけに、私達の現存すること世の中だけでも、少くとも私達の「川柳塔」だけでもしっかり落ちついて、少しでも豊かな健康な夢を築きたいと念願するものである。そして、すべての人達が、毎年毎年の年頭所感の中で、昨年の「川柳塔」はすばらしかった、今年も更に一層すばらしい年であることを期待してくれるように渾身の努力を精進したいと決意して居る次第である。倍旧のご支援、ご鞭撻を冀うて新春のご挨拶に代える。

水煙抄選者

北川 春巢

川村 好郎

菊沢小松園



伊万里の虎

東野 大八

春浅き窯里ゆけば遙かなる

古染の匂い哀しみまさる

十一月半ばの寒い小雨の中を、私は伊万里市大川内のせまい小径を上っていった。この道はすでに三度歩いたが、湿った山肌の冷たい土を踏みしめるたびに、なぜか詠み人知らずのささきのうたが聞える。しかも、この磁器のふるさとの風の中だけにそれは限られているのである。

この古伊万里の里は、墨筆たっぶりの水墨画さながらの、蒼い古松を随処に茂らせ、沖天に屹立した巨大な屏風岩山の底にある。まるで怪異な巨人の山男の、節くれだった五体に三方から押しすくめられた乙女のように、その大川内の窯場の小部落は、あわれ一途に脅えぬく形ともみえた。

部落の入口には、ペンキの剥げた棒坑があ

って、ここが山役人が詰めた旧関所跡だったことを示している。その手前の上り口を横にそれた小川の短かい土橋を渡る。そこには小山なす々無名陶工の供養塔がある。幾百、幾千とも知れぬ古い墓石がピラミッド型に積み上げられて、中空に向っている。その尖った頂点に一基の石地蔵がぼつんと立っている。その小さな人影のような古びた地蔵様は、その小さいお顔と背中で懸命に暗い雨空をささえてござる——私にはそんな風にみえた。

弥十、市兵衛、喜助、おさよ——そんな稚拙な文字が辛うじて読める下積み古の墓石はもう仲間の墓石の重みに閉口して、早いところ土の中の石くれに還りたがっている。なかには梵字めいたものだけの角石もある。朝鮮人陶工の仏と知れた。

鍋島藩はこの大川内の天嶮の要害をこれ幸いと、この部落の窯場を藩窯と定め、外界と

の交流を一切厳禁した。出るもかなわず入るはなおさらの、そこに閉じ込められた数百人の陶工たちの中には、豊臣家が起した朝鮮征伐という名の侵略によって拉致された鮮人の陶工たちも数多くいたことである。この付近の農家から、藩命によるあてがい女房をうける幸せな者もいたが、大方の若衆には女が貰えなかったのである。こうした陶郷の暗い陶奴的抱束は、明治の廢藩に至るまで三百余年の間つづいたのである。

「諸州数品有る中にも肥前国伊万里焼というを本朝第一とす。その窯山およそ十八カ所——大河内山（大川内の旧名）赤絵町、皿山下つづく」（寛政十一年刊『山海名産図説』）有田、波佐見のいわゆる日本一の天草陶土で作られる世にいう有田焼高級食器の一翼を担ったのがこの伊万里だが、その古伊万里の逸品は、禁裡、幕府への献上品のほかは、鍋島藩主一家の食卓にしか用いるを許るされなかった。家老以下は雜器に限られるというきびしさである。

「お殿様が用いられるもののほかは、お殿様立会いのことごとく打ち砕かれたのです。勿体ない話」と案内の地元メーカーの社長は語る。

部落のせまいコンクリートの道を歩くと、陶工のいる家には、さまざまの製品が並べられていた。色鍋島の大ざらや、豪華な置ものの獅子、慈顔光らせた大小の観音像など、そうした中に、ふと私の眼にとまったなかに古陶器の絵ざらの幾枚かがあった。

これらはすべて一筆描きだが、丹念にみていくと、次第に頬がなごみ、微笑がただよい出た。その素朴なタッチには花鳥禽獸がいたり、ひよげた神仙の姿もあったことだがどれもみな、のびやかなユーモアをたたえ人肌のぬくみを帯びている。心ない松や杉にまで腰をひねり、腕を屈伸させて、みるひとをあたたかく誘ひこまぜにはおかない。

じつとそれらに見入っていくと、ちよんまげを砂粉で真白にした陶工たちの、ある日ある時のころのあり様がうかんでくる。その筆使いは、望郷の想いが身を囁む陶工たちの希望のない日々からすれば、愕くほどの明るさが漂っている。暗い秋雨にしとどに濡れた無人陶工たちの供養塔のイメージとはまさに対象的なものがあつた。

ある一つの絵ざらの屈託なさに私はこんなことを考えた。山役人が監視の中の、貴重品や大作での仕事には、みじんも心ない遊びは許されなかつたであらう。彼等がそうした大きな仕事のと、ふいと氣ままに手にした雑器には、つい一筆のくつろぎがでる。解放感に溢れた奔放なその筆使いには、女房どもが亭主への問いかけや、仲間うちの女連れへのいたみつけや、羨望がつい筆先に走ってしまつばくろも手にしてこの絵をみるや、そのつばくろも女だぜ、なんというその色つばい頬や胸の丸さ。と、与作は喜助のかかあのおさよに惚れてるワツハツハ。その笑いの乾きのあとは涙かもしれぬ。

やがて私は、伊万里焼十三代の川副青山と

いう陶工の本宅に入った。当家はいわばこの大川内部落の村長格の名家である。そこは古伊万里や色鍋島の豪華爛爛たるコレクションの山である。巨漢の相模取りが仕切りに入つたような色絵の大獅子に至つては国宝級のものときかされた。そうした息詰るような逸品名器の中に、ふと私は異様な生物の視線をうけている感觸にも襲はれはじめた。庭先にみたくこの家の飼犬もさし覗いたか、そうした落ちつかぬ予感に思はずふり向いた眼の先に、一尾の成犬ほどの黄色の獣がうづくまつているのに気づいた。虎である。しかもそれはやききそのもので作られ、彩色された置物の虎なのである。

その虎はらんらんと私の眼に青白いその眼で牙をむき前脚をふんばりその力は二つの石のような痛を肩先に作つて、黄色と漆黒の斑描の後脚の踏んばりは爪先にまでおよんでい。凄絶なまでの怒りの虎の形想だつた。思わず慄然と冷たいものが私の背筋に走つた。うう。うなつたのは私自身だ。

「名作でしょう？二百年ほどの昔、ここでも名うての陶工と知られた半島は羅山の生れの男の作で、実物の野生の虎と幼児遊んだことがあつたと添え書にあります。清正が退治した虎のさしずめ仲間ともみえる虎です」

私の緊張ぶりを察してか、主人はそういつて笑わせてみせようとする。私は笑えない。

この虎のもつ異様な殺気は、朝鮮生れの異国に拉致されたその宿命への怒りが宿つて

いる。見ろ：凄しいこの四肢の力や、眼の光りや牙の輝きはただごとではない」

鐵、カプトに汗と脂と血糊の臭いをこめる鋼鉄に身を固めた異国の軍団。彼等のもつキラめく槍の穂先や、刃劍の光りに追いまくられていく五体むき出しの粗衣一枚の朝鮮人の一群。疲労した汗と埃の五体が踏みしめていく裸足の指―肉身は殺傷されわが家は灰にされた挙句、敵国の武裝した集団に奴隷の如く囲まれていくわが身、絶望と憤怒と自棄の果ての虚無、それらを押し包む寂寥極限の孤独―彼等はそうした身と心のままで玄海灘を追いつたてられ、異国の山狭の底の一陶工となつて朽ち果てるのだ。囚らずもその暗い幽囚の底でめぐり合つたのが虎の制作である。創るその虎の五体に、彼は哀別離苦のわが故郷の山河と肉身の姿を見出し幼児なじんだ虎の姿を心のそこに捉えたのである。わが悔痕の涙を宿命の暗さにそそぎかけつつひねる土くれには覺えず渾身の怒りが力をこめて走つた。悲運の生涯の絶望感はかくして一人の人間を猛々しい怒りの虎と交じさせた。

やきものに限らず手づくりの物づくりには無心の中にも作る人の心は巧ずして宿るのを常とする。殊に土と炎のやきものは、たえず作る人のところをそのままに受取りやすい。怒りの虎もやがては、いつしか古染の匂いの底に安らぎもと戻す、まさに窯里いけば哀しみまざるである。

略として、小生は「立つ」説をとりました。

737 しりがかい、という事を陰間間 水砥

34オ六

岡崎||尻は陰間の商売道具だが尻がかゆいという話を聞く俚諺があったのだろう。安永二年刊「口拍子」に主題句そっくりの咄がある。

はやる陰間、廻男(まわし)を呼び「おいどがかゆふてならぬ」男「アイそれは結構な事ござります。明日はよい事をお聞きなされませう」

高須||「耳がかゆいと良いことを聞く」という俚諺をもじったもので「陰間」だから

路郎先生の新年吟

昭和28年から37年まで

不二田一三夫

(各新年号から新年吟らしいものだけ抄録したが、32年には新年吟はなく、また34年の「初日の出」の句が、40年に「新春雑誌より」として再録されている)

昭和二十八年

年玉をやるに老眼鏡を掛け

付録だけでエエと 編集侮辱され

昭和二十九年

ストをした顔もしないで年賀に来

「尻がかゆい」とからかったものであろう。

この「聞」も「聞き」か「聞く」か、どちらであろう。われわれの常識では「聞き」であるが、現代式には「聞く」とも読む。丸||礎稿、高須説に賛。つまらない句だ。岡田||同。小生は「聞き」を採ります。

738 好きな後家ころんでも只おきる也 亀遊

34オ七

岡崎||転んでも只では起きない——というリンシヨクの諺をもじった好色後家の無料サービスぶりである。

高須||これも「転んでも只は起きぬ」俚諺の逆を言ったおかしみを言ったので、「好

幸福は春早々も旅仕度

人が来たから床を出る松の内本の山それもうれしい寝正月

読む筈が飲んで暮らした三カ日

昭和三十年

一年の第一日にブラン無く

四方拝 ことしも約手割れるよう

社長からして 寝正月するという

昭和三十一年

足袋の新らだけが僕には春が来た

舞初めに母も坐ったままで舞い

まだ飲まずとこを探がすも松の内

昭和三十三年

三悪も追放出来ぬままの春

世界がどうなろうとも炬燵に居

き」だから「只でよい」ので「知るまいと思つて後家の堅い顔」をしているが、度重なれば……。

丸||礎稿賛。だじゃれにすぎない。岡田||同。

「柳多留二十五篇研究輪講」

三月号から新掲載の予定

岡田甫先生ご指導の古川柳研究メンバ―による輪講は「川傍柳初篇研究」完結を待って「柳多留二十五篇研究」が近く発表されます。ご期待ください

葉牡丹のつかみどこなし哲人の如く

昭和三十四年

初日の出 自由はここにあるものを

音痴でも君が代だけはうたったが

凡人にとつては松竹梅もよし

生きのびた印しに出した年賀状

昭和三十五年

賀状は出しませんよと歳末別れたり

玄関で失礼をするお元日

昭和三十六年

おじいさん もう元日の咳をする

長寿長寿しなげるだけはしなびたり

昭和三十七年

元旦から心にもない世辞をきき
どっかで三味が鳴る明治生れの僕の新春

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

するすると今年の暮は下りそうだ

十二月僕の歩巾は変らない
有 信 新之助

西 いわを

とかく十二月の句と云えばやりくりしに困ったとか、多忙だとか、一年反省の句だとか、余り明るい句が発表されない。凡そ世の中万事苦境の中にも一面喜ばねばならぬものがあり、順境の中にも太陽のかがやくところ影が生ずる如く苦があるものである。作句する場合でも、誰もが作るであろう十二月の暗い句の反対の側を発見して作句することも大切であろう。上記の二作家はそんな作意があつてこんな句を作句されたとは私は思わない。今日のこの激動の世に今年も無事に暮れそうだとか、確かな歩巾で過ぐせそうだと詠める倅せ、決意に敬意とよろこびを感じ。そしてその通りの作家であることを信じ、羨しいことである。

石だたみの余韻歴史が通り過ぎ

正本水客

名利由緒ある神社の苦むした、すり減った石だたみを履み登る時、昔あの名将が通った道、世をはかんで遁世の尼僧が歩んだ石段そんな事を思い、石だたみを静かに履んで行くことが私たちにも経験することである。その足音の余韻に歴史が通り過ぎると詠んだ詩情もある表現、心憎い程水客調がにじみ出ている佳句である。

北まくらさせた姿の日本地図

不二田 一三夫

経済高度成長、日本列島改造、福祉元年と云われた日本、この間まではのんびりと寝そべっている姿であった日本地図も、今やご臨終の姿に見える。「日本沈没」ベストセラーも宣なるかなである。堅くるしい言葉を使わず、北まくらにさせた姿とはうまい表現である。

ソ連からヒタヒタ押して来る波か

河原 みのる

北海道とところどころという前書きが付いて一層心を打つものがある。近頃各地へ観光に行かれる柳人が増え、川柳塔に発表してられる句を見て、暇のない金のない私にはうらみやましい限りである。しかし美しい景色を詠み、感じるところを句にしていられるが、絵ハガキを見るような、又何処でも誰でも思うような句が多い。その中でこの句一歩前進して今日の日ソの関係までも詠んでいられる。単なる紀行川柳でないところがよい。

愛情は酒の空壇まで隠し

出原 敬一

この作者禁酒余儀なくされているのである。ムツとしていられている愛情に感謝されている。愛情の二字が生き、酒の空壇がユーモアも添えてほえましい句である。

雑音の聴えぬ耳を嬉しとも

柳原 静香

難聴のこの作家、不自由な、腹立たしい事も多かるう。又それなりに倅せなこともあると負け惜しみでなく、苦の中に喜びを見付けていられる生活態度がうれしい。「嬉しとも」が生きている。

川濁りつつも大空見て流れ

八木 千代

今の世の姿を詠んで、その中にとかく濁れた私どもも、真を求め、大自然の摂理に順応して生きねばならない事を教えている含みのある句である。

鯉かきあるかときいて松魚あげ

阿茶

再会へ指輪の位置が気にかかり

鬼焼

オイル洋式その瞳も碧くなりそうな

君子

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

この俺がグラフに化けた心電図

原田輝親

健康診断にある心電図。レントゲン写真なら、自分でも大体わかるが、心電図のグラフは素人には見てもわからない、俺の心臓がこんなグラフなのかと一驚の句だが、グラフに化けた心電図とはうまく省略して要を得ている。なおグラフの波の高低を、或時の処女のとときめきに似ていると詠まれていればと思うが、十七字では贅沢であるか。

枯葉舞う視野に未完の心抱く

小谷 葉子

先ず、夢二や虹児の画く乙女が、窓辺に座って、枯葉が舞う景色を虚ろな目で見ている光景が浮かんでくる。そして、未完の心抱くで、作者の心境がそのうつろな目であることがわかる。未完の心とはどんな心なのか、この情景にしては些か固い言葉である。迷いの恋心ではいや味だし、やはり原句が良いらしい。

アイシャドー落せば膝へ子がまとい
ひたすらに生きて自画像いとおしむ
合理主義仮面をばげば非人情

仲原 己 恭

この一連の句を通して、未亡人が世の荒波と斗っておられる姿が、想像される。名前からしては、男女いづれか知らないが、単なる想像句でないことは、はつきりしている。第一句はよく誌上で見かける句想であるが、第二句によって第一句が光って来、又第三句は前二句の結びとなって光っている。第二句のひたすらに生きて自画像いとおしむ、自画像が大変よく効いて、見知らぬながら、その自画像が、段々クロスアップしてくる。まこと秀吟である。既に十年以上のキヤリアのある作者であろう。

百才を生きればニュースの顔となる

大原 葉香

ニュースの顔が非常に面白い、長生きも芸のうちなどと悪口をいうものもあるが、百才を生きるといふことは、生きる者も、生かす傍の者も仲々大変なことである。おだやかな年輪の皺の波が、ニュースの顔となった、まこと綺麗な顔である。

暮しから生れた言葉いふし銀

つぼを得たいたわり見せる聞き上手

小山内 貞 男

この二句から作者のおだやかな、心根が、はつきりとうつつて来る。

いふし銀のような言葉、それは常日頃の暮しの中から生れてくる貴い言葉である。

話上手より聞き上手という言葉がある。唯単なる聞き上手で相槌ばかり、うっているのではなく、つぼを得た、いたわりの言葉も時々には聞き上手でなければならぬ。作者のやさしい心と、平和な暮しが察せられる羨ましい秀吟である。

▼前号本社会「牧人選「豊か」の「ひと鉢を咲かせてゆたかな秋にいる」俊夫と訂正

第8回岡山県川柳大会

△白百合川柳会主催▽

日時 昭和49年1月27日(日) 9時開場

場所 岡山県邑久町尾張——邑久町公民館ホール。邑久駅より徒歩五分

雑詠 中島生々庵。大森風来子、丸山弓削平。寺尾俊平

兼題「触れる」 水粉千翁選

「踏む」 光岡早苗選

「犯す」 坂井三葉選

「鏡」 藤川良子選

席題 当日2題発表(各選者毎に別句2句)

特別課題 1題(兼席題共2句ずつ)

柳話 川柳塔 川村好郎

会費 50円(昼食発表誌参加費呈す)

投句のみ会費150円(25円郵便切手可)

投句締切 49年1月23日必着のこと

投句先 70—42岡山県邑久郡邑久町真徳

白百合川柳会 喜数千代香宛

県知事賞ほか総合15位まで



北川春巢選

高槻市 竹 内 花代子

落ちつかぬ花むこ様をたしなめる
留守番へ働く者のぐちを言い
湯豆腐のゆげぬくぬくと嵯峨の秋
京の町又湯豆腐に突きあたり

西芳寺にて

枯山水苔は流れるように燃え

和歌山市 秋 月 宏 方

人生という荷を夫婦してかつぎ
見たところこんなよい娘が嫁き遅れ
神さまの従業員に宮司坐女

垂井葵水氏を悼む

極楽へちと早すぎた君の旅

竹原市 三 宅 不 朽

鉋研ぐ身ぬちに泉湧くごとし
水引をまた買う菊のいま盛り
出稼ぎに行かねばならぬ祭りすむ
庭を誉め陽当りを誉め値にふれず

東京都 山 根 白 星

ルージュ濃くしても始まらぬ始まらぬ
ネクタイで悲劇喜劇の燕尾服
刀剣に見入り黒幕返事せず
閉店の昨夜、修羅場と化したバー

大阪市 阪 上 十 止 庵

政略結婚人形が立つ金屏風
裸になってもまだ女には嘘がある
銀髪の友この人も生き抜きし
大阪の広さひとりで生きられず

大阪市 堀 口 欣 一

銀座八丁ピカソに似た人に出会い
妥協性愛し最長不倒距離

踏みしめて行く人生の下り坂
予備校のまた継ぎ足して継ぎ足して

岡山県 谷 川 渥 子

たくらみを秘めたエクボとも知らず
ふけば飛ぶ心一つをもて余し

煩悶を消ゴムだけが知っている
又同じ悔あり憎い十二月

三重県 川上富子

ほんのりと酔うて今夜は悪女なり
記念撮影人間様を盛り合わせ
やわらかくやわらかく見合い断わられ

葵水先生急逝

道標消えて闇夜がのしかかり

青森県 荒田つる

割勘と知り早々に腰を上げ
招待状二度目は省く方にされ
極貧に慣れて頼らざうらやまず
大役を果して酒が酒の味

守口市 岸本豊平次

頂上に立てば麓の美しく
足音で笑いが止まる台所
デパートが派手すぎる程老母も古り
故里の山が長屋をかう足しに

尼崎市 中谷利美

計算をすれば家建つほどは飲み
じっとして居れない妻で医者要らず
時は金なりを忘れているおしやれ
内心は親に似ぬ子で頼もしい

東京都 宮崎美津子

老父母上京(二句)

上京の老父母ふるさとを連れてくる
短時日だから束ねて見せた愛
買物籠辛党だけの急ぎ足

山茶花の微笑につつまれ秋日和

大和郡山市 森田カズエ

草餅とペアで実家の母が来る
亡母の夢みたら墓へ廻り道
美声ではないが音譜にちやんとのり
食前と食後ですらすベルト穴

八戸市 安田勝己

学歴不問その学歴にけつまずき
パンタロン引きずるように兎の手引き
虎の威をかりてと金に成り下り
悼むより死因を先に聞きたがり

寝屋川市 江口度

つり池のすいてる村の運動会
くそ真面目が加わり御通夜の宴となる
因果はめぐる尊徳の像も光り出し
得意先の社員が大きく見える時

和歌山市 垂井千寿子

夫の急死

加害者が泣く私は涙を置き忘れ
愛すればこそその妬心も懐かしく
パパと言う禁句我が家に淋しい日

今治市 渡辺伊津志

嬉しい日雲の美しさに見とれ
保護色の中で抜け目のない瞳
借り毛布元軍人としてたため

大洲市 堀内 眺風

血まなこの恋もいまでは凡夫婦
真正直変人にされ利用され
好きなのが無芸の代り出て唄い

石川県 同紅要改め村よさく

タレントの悩みゆっくり眠りたし
あきらめて美容体操やめにする
定年者かん迎月給書いてなし

榎原市 西本 保夫

平社員も一役買った省力化
平社員ここでは使い捨てられそう
平社員自然を愛す妻と居る

岡山県 永宗 宗義

三十年振り大阪に立って(一句)
なつかしの橋は地名として残り
この次はどこで借ろうか十二月
もう泣いた後だよハンカチ間に合わず

尼崎市 小林 文月

敬老日遠い所に娘らが住み
ふえもせず減りもしない年賀状
末妹の還暦に座す年となり

貝塚市 行天 千代

秋深し養毛剤へ手がのびる
二泊三日六十路の母もソワソワと
便秘薬飲んで旅行の準備出来

神戸市 佐々木 静泉

値上げ値上げで食欲の秋も過ぎ
参観日笑わすコツも覚え老い
自動扉のように開かぬのも女

高知市 竹崎 寛

揉み手して待たされて買う十二月
ちり鍋の蓋が妬いてる差し向かい
銭のない休みだ風呂を沸かそうか

和歌山市 仲原 己恭

若者と明日へ踏み出すバイコロジ
おしきせの味が冷凍庫にズラリ
想い出に生きてガラクタばかり増え

大阪市 小谷 清女

手作りの菊ほのぼのと秋日和
鼻息の荒い昔の小作人
愛情に報いた花と対話する

新潟県 市川 一峯

名誉職受けて今年も貧に生き
席譲る少女の顔の美しさ
都会人空気と水をほめちぎり

守口市 野呂 右近

紙台風去ってやれやれ選挙戦
ダイヤとダイヤ火花を散らす園遊会

青森県 波

ただお

徹夜した頭をテスト笑ってる

値上がりのグラフにクビが追いつけず

宝石を窓ガラス越し見て帰り

大阪市 神夏磯

道子

遠ざかる若さへ赤い色を着る

珠のれんセットの髪にからみつき

マタニティ一度も着れず女失せ

豊中市 安藤

寿美子

年賀状今年の干支はネコかいな

缶ビール女ひとりの宵によし

南天の実を盗る鴨のおよび腰

今治市 原

田輝親

派手なのは造花であった華道展

撒き餌するように代議士仲人をし

声出して星占いを読んでやり

今治市 大

本バット

柿熟れた蜜柑が熟れた孫を待ち

志功彫るようにクレパスこする孫

火を付けて消してノーベル平和賞

今治市 伊

藤一郎

春菊は貴重な土地を付けて売り

踊り子は老人ホームからも出る

職場旅行パートの方もお連れする

今治市 真

山国彦

もももぞと悪書を包む古本屋

石仏も若やぎ給う曼珠沙華

食べさせて後で大根の値を知らせ

今治市 今

井松花

盗掘の石買い集め庭作り

痛いほど手を握ったも酔いの内

腹話術言いい度い事が言えてよし

今治市 古

野伶人

銀杏葉の散って明かるさ土へ下り

女房よ柄はタンスで年取らず

そっとして置いて欲しいも老いのゴゴ

和歌山市 津

田与史

惚ぶ故葵水先生(一句)

アツと云う間に土台持ってかれ

孫の顔ニツコリ迷わずケーキ買う

老妻の尻重くなり秋深む

豊橋市 鎮

浪翠月

忘れ得ぬ人は臉でかかげぐり

御見舞の菊を大事に水をかえ

職のない者にきびしい求人欄

寝屋川市 井

上武松

文化祭あつと驚く局長賞

松坂屋秋の若人花展にて

此の石がお花ですかと尋ねられ

和歌山市 樫

村 ふみよ

五臓六腑得心をして禁酒

大阪市 吉

野 志 津

赤とんぼうたいつがれて姿なく

雨の旅出たら出た気で見る景色

花に傘着せてお盆の墓詣り

羽咋市 三

宅 ろ 亭

夢の彼いつもなんでか向うむき
野仏をぐるりかこむは彼岸花
秋日和長く伸ばした影二つ

大阪市 小

谷 葉 子

前の背へ願いをこめる初詣

年賀状どつさり元旦らしくなり

子の電話妻活き活きの声を出し

羽曳野市 麻

野 幽 立

曼珠沙華恋の終末みとどける
愛の射程で過保護となつて
春風を待たずに真夜中のひとり旅

備前市 武

内 雅 堂

ひがまれる程の出世へ父母は居ず

倅せな貧乏でよし子等巣立ち

耐えて来た過去が遊びを遠ざける

仙台市 川

村 映 輝

居留守をつかう白昼のドラマ
蒼い樹に囲まれ河童棲み馴れる

新潟県 高

野 不 二

菊満開落葉拾いに励む朝

据え膳が嬉しく妻が旅に出る

座りだこ孫はげげんな目で眺め

大阪市 鈴

木 生 仏

裸婦像をながめて初日へ餅こがす
音のする物みな寒し寝正月

厚木市 高

野 芸 太郎

あの顔で足で水飲む菊人形

秋風にせみのぬげがら軽くおち

菊人形見る日は出なよ神経痛

大阪市 内

藤 ますえ

メロドラマひまな女を又泣かす
寡婦という楯で女を忘れてる

寝屋川市 福

富 隆 子

消費者のお知恵を借りるアンケート

庶民われ公害に耐え税に堪え

医療費の無料をつえに生き続け
芋掘りがすんでスーツにヒール

前月分 倉敷市 津

田 耕 水

三カ日意外な人が酔うて来る
わが影が踏めぬ大地へ逆らわず

岡山県 吉田落猿

秋場所が始まり日課一つ増え

外は吹雪サーモスタットを強に上げ

宿毛市 山本窓花

老人の生きる喜び年金日

妻に似た書体の便りで来るむしん

鳥取県 林露杖

町の文化祭(一句)

ちぎり絵の出来映え柘榴がこぼれそう

裸像群舞マネキン只今着いたとこ

鳥取市 大塚豊生

風紋へしみじみ語る過去があり

両となり下戸で末席へ座を移す

岡山市 花田たけ志

筆不精用意万端してたのみ

旅だからかむっただけのベレー帽

西宮市 両川康博

心から笑えて今日の酒に酔い

にぎやかな話題も添えて母見舞う

和歌山市 吉野富子

ハッスルじや無いが世渡る体当り

たくましい寡婦運命にさからわず

青森県 田沢つとむ

ドンチャンの騒ぎ公金踊ってる
黒い星が続けば病氣再発し

河内長野市 井上喜醉

小粒でも大きな声で顔が売れ

頂上に立てば派閥の雲が湧き

鳥取県 安履翁陽山

結末をつけてメンツが立ってゆき

民芸のカスリブームで息をつぎ

松原市 守屋万竿

西の京にて

薬師寺に夢は遙けし絹の道

水煙の水面にゆらぎ秋も暮れ

鳥取県 福田保子

さおまでを夜釣りの海に持ってかれ

承知したはずが家裁でもめにもめ

鳥根県 錦織文子

救急車現場の月がきれいすぎ

帯しめて心静かな歩巾持ち

姫路市 大原信好

芒の穂そと撫でれば秋だった

紋付の羽織も酔って宴終る

大阪市 横地正彰

年金で足らず稼いで税が殖え

一寸の虫ネクタイの歩を阻む

堺市 栗本藤持

冷蔵庫開ければ貧乏一寸見え
お土産を頂けばすぐ値ブミする

大阪市 新川 貞祐

人を喰ったコマーンシャルのオクターブ
性別国籍不明が恋の唄

赤穂市 谷口 赤童

ゲバ棒で智仁礼をぶつとばし
年賀状長男の嵩が俺を越し

名古屋市 大林 曲ん手

叱られて見せてる手先が器用すぎ
尻餅をつく大きさに敵がいる

呉市 佐久間 文明

青い鳥探し新婚旅に出る
娘心指の先きまでよく喋り

泉佐野市 大工 静子

身だしなみする程家は片づかず
禁煙にかくも嬉しいレントゲン

弘前市 小山内 貞男

ひたひたと迫る老知る夜のしじま
心にも四季北風が吹き抜ける

高槻市 山田 スミ子

サンマ豊漁我が家も焼く煙
派手な色好み五十へ近い年

大阪市 花田 繁子

頭から足まで男女わかり兼ね

大阪府 須浦 つね
表札と下駄にだけ亡夫生きている

和歌山市 垂井 一睡

亡き兄葵水に想う
去り行く葵水ひとり野末かな

島根県 岩田 三和

冬仕度農家のかおりミソづくり
ひとり住まい男出入りに気を配り

茨木市 吉川 米子

老骨の誠実後手に甘んじる
新潟県 栗和田 清子

大阪府 平井 露芳

舶来の毒まで出して草が延び
聞こえない振りは都会の悪い事

倉敷市 津田 耕水

行列の背中へ払った拝観料
モノ不足ゴミ戦争も片付かず

岡山市 岡 英好

一段の進歩ですぞと励まされ
老夫婦金婚感謝の神詣で

大阪市 広畑 賛平

初恋もつもりつもり春の雪

大阪市 村島 秀村

川柳 中山道六十九次 (II) 富士野鞍馬

56 赤坂

美江寺から二里八町(八・七キロ)

此宿美濃国不破郡・安八郡の郡境にて宿内に石標あり。呂久川船渡しが挿絵にある。

赤坂で宵には吉次大持てさ

(天元松3)

という川柳があるが、金売吉次は、熊坂に襲われる前夜、赤坂宿でもてたであろう。

吉次が来るで熊坂はひるねなり

如雀(三一26)

熊坂長範は、次の青墓の里で待っていたであらう。

青墓の里に、熊坂長範物見松という老松がある。強賊熊坂長範がこれに登って旅人の通行を見張っていたという。

熊坂の着物は松のやにだらけ

柴川(二九11)

熊坂の足へとまってみいんみん

古柳(二七6)

——蟬

そこへ奥州へ下る金売吉次が牛若丸を伴い、此処を通る時、熊坂一味の襲撃をうけたが、牛若丸に討たれた。

熊坂は十六七にしめられる

マイタ(三八19)

御曹子十四人目に熊を切り 玉章(三五24)

五十七人は赤坂さしてにげ

(二二11)

熊坂一味は七十人、十三人を牛若丸が討った。

牛若が居ぬと熊坂大仕事

(六15)

源義朝の次男朝長は、平治の戦で敗れ、父と共に東国へ逃げる途中、足を負傷していたので、到底覚束ないとして、この青墓で父義朝の手にかかって果てた。その墓が青墓の里にある。

朝長はよしや生きてもびっこなり(五26)

よしや君弟御達も散るさくら(此筋)

青墓の里は、むかしは一駅であったが、江戸時代には小里となっていた。挿絵に描かれている。

57 垂井

赤坂から一里十二町(五キロ) 駅中東西六七町ばかり相対して巷をなす、其余散在す。

此辺都會の地にして商人多し。宿中に南宮の大鳥居あり。

南宮といふのは仲山金山彦神社で、美濃国

一の宮である。挿絵にも描かれて、図会に、

それ当社を南宮と称する事は、離火南方を

司とする故にかく号くるなり。陽神にして文武兼備の故に国家崇尊す。或は世の騷擾の時、奉幣ありし事あまたたびなり。所謂天

武、朱幣の朝に、此神功を我國に施し給ふ。慶長の乱には、叛族安国寺ここに陣

し、此宮を焼払いける。其后大猷院公の御時、今の如く悉く御再營ありしなり。

と書かれ、大鳥居から八〇〇mである。

この南宮から八キロ多度山中に有名な養老の滝がある。高さ三〇m巾四m、この辺は今

養老公園になっている。

養老の滝は、元正天皇の御宇、孝子の伝説

ならびに靈泉湧出の奇瑞あり。至孝上間に達

し、靈龜三年(七一七)八月近臣を遣され、九

月天皇行幸あり、醴泉は美泉をもって老を養

うべしと宣い、天下に大赦し、十一月十二日

年号を養老と改元したもう。というのである

が、専ら孝子の伝説が普及して、樵夫源丞内

が孝心深く、この流水を汲むと酒であって、

それを父に飲ませたというのである。

孝行の恵は滝を水にせず 竹子四二七

天孝心を水にせず酒となし 杜撰(六二)三

年寄の冷水でない美濃の滝 春駒(二六)二

滝の水呑で親仁はよふるよる 里鳥(八八)十

孝の徳水百葉の長となり 器水(九七)十

養老の滝孝行の壺へ落 麴丸(八四)二

養老の滝まで下に下になり (四一七)

養老の滝へは甘露寺を勅使 雨草(傍二)二

年号は名酒に残る孝の道 雨夕(三三)八

挿絵には、「孝行のこころを天意水にせず、

さけと汲する養老のたき」と賛がある。

垂井から関ヶ原の間に野上里がある。むか

しは一駅であった。挿絵に北園街道とある。

一夜かる野上のさとの草枕

むすびすてつる露の契りを 定家

58 関ヶ原

垂井から一里(三・九キロ)宿中に八幡宮の祠あり、此処の生土神也。此祠の側より若狭、越前へ通る北園街道あり。昔、不破の関があったのでこの辺を関ヶ原という。

不破関古蹟は松尾村の内西の方藤川東の岸上也。此辺の字を今大木戸という。不破の関の始は天武天皇二年(六七三)より此関を建らる。逢坂の関が出来て不要になり、延暦八年(七八九)廢された。古歌に多く詠まれてゐるが、川柳は、

時雨ほど落葉にさわぐ不破の関

不破の関首にからまる稲光

杜撰(七八二)

(武十一)

更け込んでかひなき不破のひと時雨 玉兎(八三)四

月中とよいから雨と不破のせき くれし(七一)十

立派だと名所にならぬ不破の関 杜撰(七九)六

と荒れはてた様をよんでいる。

関ヶ原は、慶長五年(一六〇〇)九月十五日

日、石田光成軍と徳川家康軍と合戦した古戦

場である。この戦は双方約八万の兵であった

が、三成方の小早川秀秋(金吾中納言)が家

康方についたため、三成の敗戦となった。

関ヶ原すてつべんから押碁なり (四三二)

尻から金とうたれたで石田負 平洗(三四)三〇

碁将棋にたとえ

ねがへりをこつちへ打た関ヶ原 玉兎(九七)三

——小早川秀秋

草も木も東へなびく関ヶ原 其岩(五八)二

——東軍家康勝利

とらの尾を踏んだが石田百年目 濃川(五一)二六

——とらは家康

かつたいと棒打をする関ヶ原 (二三)九

——石田方の軍師大谷吉隆はライ病

関ヶ原手柄は笹をほうばらせ 東水(三三)四

——可児才三はとつた首を笹竹に括りつ

けた

不破河内守光治の砦が松尾村の南にあるが

小早川秀秋は此所に陣したという。

竹中半兵衛重治の城跡が関ヶ原の北方磐手

山、菩提寺村にある。天正七年まで居城した

という。半兵衛は信長、秀吉に仕えた智者、

軍師であった。

——武道の賢者木の下と竹の中

——木の下は秀吉

ユーモアについて

笑いの要素「くり返し」

北川 春 巢

ユーモアについて研究していると、ユーモアは必ずしも「笑い」ではないことが分つて来た。ユーモアには、残酷なユーモア、意地の悪いユーモア、しやれたユーモア、冷笑的なユーモア、好色的なユーモア、陰險なユーモア、気味悪いユーモア、小生意気なユーモア、そしてもちろん楽しいユーモア、などなどがある。そしてわれわれの川柳に欲しいのは、最後に挙げた楽しいユーモアである。

こう理論的に考えてくると、「近頃の川柳にはユーモアが少ない。」というのは、本当でない。ユーモアはあるのだが、「笑いが少ない」と云い変えねばなるまい。

昨年度「川柳塔賞」受賞作品の

めでた めでたで

ひとり娘をもつてかれ

堀江芳子は、ユーモアの句の最上級の句のひとつだと思ふのだが、この句には「笑い」はないようである。この句を薫風氏がいみじくも次のように評しておられる。

「一人娘を嫁がせた親の複雑な心理を詠

んだものである。親戚縁者、近隣知己が集つて唄う婚祝歌の賑やかさ。めでたく嬉しい現実の中に、心を吹き抜けるうつろな淋しさは如何ともし難く、二十数年愛育したわが分身を掠奪されるのだとも思えてくるのである。この句の表現上の優れた点は、よく知られた民謡の文句取りから、婚礼の華やかさを様々に想像させたことと、殊に語尾を「もつてかれ」と荒々しく表現したところである。下略：」私も全く同感である。

「表現上は民謡の文句取り」と書かれてはいるが、なるほどそう云われれば、そんな文句の民謡があるのを私も思い出した。しかし、その民謡を知ってはいなくても、「めでた、めでた」とくり返すことが、ちよびりではあるが「おかしさ」をも句に与えていることに注目して頂きたい。この「くり返し」が一般に「おかしさ」を引き起こすことは「笑い」の理論の中で承認されているのである。

路郎先生は、「おかし味」ということばは使つておられなかったが、「重語法の句」と

か「畳み句」とかを講座の中で説かれて、川柳のひとつのテクニクとして教えておられる。また「擬声語の句」も、これをうまく使つた場合には、素晴らしい句ができることもお分かりと思う。重語法、畳み句、擬声語などは、別の見方をすれば、同じ文句の「くり返し」なのである。くり返すことばではなく、それ自身、特に滑稽味があることばでなくても、くり返すことによって何がしかの「おかしみ」

II 「滑稽」が感じられることが多い。

落語や漫才にも、この「くり返し」によつて笑わせるというテクニクはぜひぶん使われている。また流行語の中にも、テレビ・C・Mで毎日聞いておれば、おかしくなることばがある。最近では、「じつと我慢の子であった」と云つても結構おかしい、相手は笑う。「三分間待つのだぞ」もそうである。使うべき所へ使えば必ず笑う。しかしことばそのものは何もおかしなことばではない。「くり返し」がおかしいのだ、と云われている。路語が少し脇道へそれた。もとへ戻らう。路

郎先生も講座の中で云われているように、川柳は僅かに十七音字しかない短詩なので、むしろ一語でも節約しなければならぬ所を、同じ語を重ねて、あるいは「くり返して」使うのでは、下手をすると却って句の力を弱いものにしたり、無味乾燥な凡句になってしまふ恐れがある。しかしうまく使った場合には擬声語でも素晴らしい。以前、一度例に引いたが

踏切はジンカジンカと夕焼ける 水客
 の「ジンカ、ジンカ」という擬声語がたまらなく良い。「ジンカ、ジンカ」は別に滑稽なことばではないがくり返すことによって、句に多分のユーモアが感じられる。

「くり返し」がおかしさの一因になるという点で、「柳多留」の原典の「川柳点万句合」の出題前句、がみな「くり返すことば」であったということは興味がある。ご承知の通り「柳多留」初篇は、呉陵軒可有が、万句合の中から題前句がなくとも「一句にて句意のわかり安い」句を集めて出版したものである。それを山沢英雄が岩波文庫から、またもとの題をつけて「俳風柳多留」として発刊している。後年になると、点者の柄井川柳も題を廃して、付句の十七字だけを独立させ一句立として詠ませ、万句合に発表するようになった。それを今さら題を掘り返すのも、アナクロニズムの感なしとしないが、試みに岩波文庫の「柳多留」(一)を繕いてみると、初篇、第一句の前句は、「にぎやかなこと〜」である。その他、その頁には、「こわいこと

かな〜」「けっこうなこと〜」、など、同じ頁に前句がまだ十題以上あるがいずれも「くり返しことば」である。繁雑になるので書かずにおく。興味ある方は、岩波文庫を見て頂きたい。これは、「くり返しことば」で、幾ぶんかのおかしさを出そうとした魂胆ではなかったかと私には思われるのである。前句からしたことのようにおかし味があるので、柳多留の句そのものはおかし味がある(ユーモラスだ)と一般に思い違いされていたのかも知れない。

元且ぞ ルバング島も元且ぞ
 カラーテレビ買うてからきみとこも
 カラーカカラーカ
 マイペースマイペースとて丑の春
 おにしゃめになれば
 おばあちゃんおばあちゃん
 女百態 春だから春だから
 まだまだまだ頭でわかっただけのこと
 金ためたためて女の業を知り
 小切手を書く間ハイハイのハイ
 疑うて疑うて寡婦礼を言う
 変身 変身 根性のない男
 嘘 嘘 騙された女鑑着る
 新幹線 ハッシ ハッシと灯り飛ぶ
 子の爪をバチリバチリと夜が丸し

薫風
 一三夫
 弘生
 可住
 弥生
 古方
 与呂志
 十郎
 小松園
 鶴丸
 誓二
 青居
 女

一分間の柳論

恩師路郎先生は川柳は人間陶冶の詩であると教えて下さった。我々は柳論を聞わすのはどこまで下わしてもよいが、その為人間関係を断絶しては、川柳をやっている価値はない。川柳をやる大らかな愛の眼こそ、愛の心こそ、川柳が立派に伸びていくのではない。川柳塔の同人は余りにも仲が良すぎる。他の結社から噂されている。それも恩師の教えを心しているからである。川柳を詠む人が排他的なことをするようでは、如何に住句、秀吟をものしても、その句には心が通っていないのではないか、川柳には寛容の精神

西尾 葉

と抱擁の心があってこそ、命ある句が生れるのである。

人類は悲しからずや左派と右派
 という句を、先生は詠んでおられる。そして、これが私の世界観である。私は常に川柳に生きることよって、平和な世界を生み出したい念願に燃えているものであると仰言っ

ていられる。
 もう一度言おう。
 川柳は人間陶冶の詩である。
 仲良くしてゆこう。



川柳ゆゑもあ特集

— 同人作品 —

(到着順)

富田林市 浅川 八郎
蚯蚓見て早い解熱の礼を言い
鳩歩るく中気の儂より早かった

倉敷市 谷井 扇水
集金もお経の長さを知っている
冗談で褒めて敬語で馬鹿にされ

島根県 堀江 正朗
都合よい事だけ聞くも長寿法
うっかりと踏んで見つけた探しもの

高槻市 福田 丁路
えべっさん頼みまっせと親しまれ
突然の客に素顔の妻あわて

山口市 羽原 静歩
安来節荷物にならぬ顔で聞き
宝くじ末尾の数もあてはずれ

姫路市 梅谿庵 不醉
盲目でもないのに白昼手をつなぎ
客な奴ジャンケンまでグウを出し

尼崎市 黒川 紫香
くっしやみもマイクは皆をほころばせ
かけとりが入りかねてる事務所の眼

八尾市 大路 美幸
どんぶりこばあさん桃を売りがたり
どんぶりこじいさん桃へプロポーズ

東大阪市 斉藤 三十四
女ぐせの外は言うことない男
寅歳の男でお酒に弱い虎

榎原市 岩井本 蔭棒
久しぶり危うく熱りが戻りかけ
神経痛よりも飲めないのが辛い

神戸市 仲 どんたく
無造作に抹茶を飲んで見上げられ
八十の祖母もやっぱり眉を引く

倉敷市 能登原 白水
氷見市 関 美子
フラ踊る何の苦もない顔をして
似た短所持つ子を力なく叱り

年始客役に立たない奴ばかり
仕事は未知数だが新任の飲みっぷり

柳井市 弘津 柳慶



用意した祝辞を前の人が言い
やけ気味の見合相手の気に入られ

倉敷市

藤井春日

富士山へ期待をかける伊豆の朝

倉敷市

小幡里風

筏乗り戻りはバスの客となり

四捨五入して仲人縁談もちかける

岡山県

出原敬一

臍くったとこへネズミが穴をあけ
招き猫背中をむける客が来る

兵庫県

河原みのる

田植する尻を数えるおやつ刻
つまみ食いその隙のない妻の舵

高槻市

若柳潮花

ほめていた陰口へひよっこり
腹立てて閉めた襖の敷くるい

大阪市

西出一栄

三味の胴たたいて寄席は派手に弾き
ベットまで連れて夫婦のショッピング

大阪市

本多柳志

何が不足か心臓のストライキ
四月馬鹿恍惚真似て見たろうか

松江市

中川晃男

借りる嘘貸せない嘘に見ぬかれる
セックス軽視神さまらしくない誤算

名古屋市

吉田水車

神さまも酔われた頃とお神酒下げ
あんな男にこんな女が添う御縁

出雲市

原独仙

春だけの髪送り出す美粧院
七五三飾引きずって引きずって

和歌山市

野村太茂津

松茸を訊けば目玉の飛び出る値
祖母はもう見馴れて黙すキスシーン

堺市

伏見茂美

人民服どこがポイント女性たる
暗闇で妻が握り返してきた散歩

大阪市

中川滋雀

すねて寝てケロツと朝は妻の顔
風鈴を指で鳴らして好きという

伊丹市

小川静観堂

珍客へお神酒も水を足して出し
電柱があるので犬は思い出し

大阪市

小林トメ子

使い捨て従四、勲三、功五かな
動植物人間で八十五デス

姫路市

大江秋月

墓までも上杉武田睨み合い(高野山詣)

物価高へ挑戦するよに妻が肥え
引越しへ盆栽二年分が増え



鳥取県 森田 布堂
離婚した妻を捜しに出る未練
写真班暴れるとこを撮って逃げ
口下手の詫びは怒ったようにとれ
ピンはねのボーナス妻に拜ませる
岸和田市 福浦 勝晴

竹原市 山内 静水
セツトから戻った妻にひげが生え
ろくでもない首をたたいてやると言い
税金を飲んでぼやいて寝て庶民
大和市 福井 野迷路

貝塚市 野坂 つき子
股ボタン気づかぬこととはいいながら
考える人のポーズで高軒
大和市 神田 秀峰

母親が出たとは知らぬ電話口
場違いな所で会った照れかくし
絶世の美人は柱の衣(きぬ)だった(ゲーテ詩集より)
大和市 川竹 松風

賛成をしたのがしがる奉加帳
わりきれぬ話夫婦だから通じ
若禿をドンパン節でひやかされ
四十過ぎ三種の道具廢れかけ
高知市 天正 千梢

藤井寺市 西 いわを
お寺さんスイスイと奥へ行き
恋人に犬もなついて恋実る
転勤へ酒屋も惜しい人でした
大和市 河股 緑水

岡山県 直原 七面山
公認と云うて仲居に連れ出され
狐にも狸にも化けて一人旅
処方箋のつもりみくじ引いてみる
大和市 堀江 芳子

日帰りのサービス「女に持てますよ」
使い捨ての世の中ついでに妻も捨て
昨日とは違う話に揉め直し
紙屑をポイと君子の顔で捨て
倉敷市 水粉 千翁

自動巻も俺と一緒の公休日
ペットコーナ九官鳥に「阿保」と怒鳴られた
素うどんにするのにメニューまだ探し
まだ泣いているのにおやつ来てしまい
島根県 堀江 芳子

スリの指タイプ打たせば速やからう
四人目もついでのように女兒を産み
大田市 藤田 軒太楼
とばっちり貰う日あげる日夫婦です

大田市 藤田 軒太楼
とばっちり貰う日あげる日夫婦です

大田市 藤田 軒太楼
とばっちり貰う日あげる日夫婦です



保険断われれば恩師の顔でなく

広島市

山田季賛

晩酌もついで居候気をつかい
ホラ吹いた手前弱気は見せられず

倉敷市

竹内翁童

安住の地を決めタンポポ根をおろし

守口市

村田瓢太

炭坑節ならって温泉から戻り
どこか抜けていて幸福者にされ

呉市

林野甦光

蝸牛さえそれぞれ家を持つてるに

竹原市

森井菁居

街角の風生酔いをけしかける
寝そびれた耳へ今度は猫の恋

出雲市

尼緑之助

保育所の抵抗それなら休んだら(次女・紀)

倉敷市

松下梁水

祖父と父仲よく禿げている脅威
御主人に似て愛犬のお天気屋

岡山市

川端柳子

丁寧に詫げればとなりの足だった
酔うほどに敬語怪しくなってくる

倉敷市

本田恵二朗

老眼鏡忘れ車を引返す
蟻の道辿れば柱いかれてる

大阪市

大坂形水

そら似不運指名手配と間違われ
小声で聞いたのに大声で答えられ

東大阪市

竹中肖二

まだ飲んでゐるのに九官鳥また来てね
酔うてない証しに逆立ちせがむ子ら

枚方市

宮川珠笑

爛ざましいける男に皆廻し
初夢で妻に云えない女と逢い

東大阪市

竹中綾女

誰に似た頭かいなと参観日
力仕事やれ肩たたけ腰を採め

大阪市

河井庸佑

子の為に風揚げしてる事忘れ
マージャンをして来て忙しい忙しい

三重県

川上大輪

すばらしい和服と見合した男
男の子五人外科医をかかえたい

堺市

高橋千万子

マネキンの少し乱れている色気

派手かしらなどやっぱり欲しい柄

倉吉市

奥谷弘朗



どう見ても猫で虎には見てくれず
いいおなら膝の孫まで笑い出し

鳥根県 藤井明朗

ラッシュアワー三色スマイルよお早うさん
東大阪市 久米奈良子

冗談が過ぎ潮時をまた逃し
原稿を見ても口下手たどたどし

香川県 三井酔夢

思索つきずぶどう一房食べ終わる
いねわりが上手になって女ふけ

呉市 榎田英詩

バケツリレー夫婦相和すことになり
月の宴飲めない人が横に座す

新宮市 大矢十郎

天寿全うしたとは子等の口が過ぎ
忘れっぽいこの人名刺二度くれる

大阪市 金井文秋

申し訳みたいな掛り湯子に見られ
女五十風呂入るドアが隙いてあり

大阪市 浜田儀一

おもちゃの電話より本物がお気に召し
甲斐性ない親に似て来て叱られず

大阪市 宮尾あいき

足べたが一人団体バス待たせ
倦怠期ダブル・ベッドが笑う意地

笠岡市 高木桃里

コマーシャルどうり残りの歯を磨く
ネオンに強く紫外線に弱い肌

大阪市 小出智子

鳩の餌売るオッサンは鳩を追
賈物をうまく買わせた国訛り

岡山県 浜野奇童

まじまじと見れば仁王さんにはかみや
気に入らぬ髪で一日落ちつかず

大阪市 河野君子

観客を泣かせて寛美笑い出し
チンチンを振り振りはしやぐ子が逃げる

神戸市 小浜牧人

セールスがひととき美人にしてくれる
押し売りに一瞬の嘘ためらわず

大阪市 柳原静香

男独り寒夜の酒の目刺焼く
悪友を証人にして切抜ける

大阪市 山川阿茶

他人の髪足して初老を派手に結び
姉の服借りて娘の恋たのし

大阪市 不二田 一三夫

戎橋乞食も長髪ひげ生やす

ジャパゴンといわれニッポン成り上がり
北まくらさせた姿の日本地図

南大阪川柳会

同人一同

柳本浜西西西中飛天城河小菊金小
原庄田出田川川田正野出沢井川
静金儀一柳誓滋好千一君智小文恒
香三一栄子二雀一梢舟子子園秋明

(アイウエオ順)

たけはら川柳会

一同

〒725 竹原市竹原町田中 山内静水

たけはら川柳会

山小三時森岩高楨
内島宅広井本橋田
静蘭不一菁文鬼英
水幸朽路居晴焼詩

八木摩天郎句碑除幕式

—ふるさとは大仙陵のあるところ—

写真も 板尾岳人



めぐりたくなし十二月二日のカレンダールで玄関に見て、わたしは仁徳御陵へと底冷えのする朝を出た。大地の生気をはらんだ大仙陵のゆるぎ難き雄大なみどりの中で、摩天郎先生の古典的な顔を見つけ得体の知れぬ感動に襲われた。

隆とした鼻ばかりでなく少女のように繊細かつ剛毅果断な性格、時には目尻りにしわを寄せたやさしい老人。川柳人の心の飢えを満される充分な風格があった。そして私は東に見える金剛の峰の美しさは汗をして一歩一歩時間をかけて登りつめることによって、初めて生きてくるものを先生の歩まれた歴史の歩中が冬への演技のように思えて感傷に侵ってしまった。

四人のお孫さんによって除幕された句碑を見て人間とは信頼するに足るものだと思う。つぶやきたくなって、わたしは一心にシャッターを押していた。

中島生々庵主幹に続き堺市長をはじめ各代

表の祝詞の続く中で、常識的な川柳家の域を脱しての偉大さが目的へ一直線に音を立てて行く、そのエネルギーのエキスを吸い込んで句碑が、よほどの気迫がなければ書けない雄渾の筆勢は各除幕参列者の胸をうつ充分なものがあった。先生にとつて川柳は目的なき漂流の連続であったかも、しかしその漂流の独特の美学の源として川柳の旅を続けられ、今ここに一つの地点から他の地点へ向う目的のための句碑建立となり、夫人とならんでおられる姿を見てわたしは円は無限の正多角形、弦と弧の誤差の少ないほど真円に近づく、そんな八木摩天郎先生ご夫妻の愛情のやさしく枯れた御心をわたしの心へ叩きつけてみた。これから益々御健康で若き川柳家を育てる



Plus

 高級洋菓子・レストラン

 本店 洋菓子部 TEL (33) 9974

 レストラン TEL (21) 2334

川柳道場主として塚の地に川柳の根を広げ川柳道場を築かれんことを望みながら白と黒との御影石の句碑にあたる冬の日射しを受けいつまでも去りがたい足を、西にゆっくり歩巾をゆるめ、記念句会会場へと三々五々、人の列がつづく、この日の感激の影を大地に映しながら……。

(十二月四日記)

私のメモ

吉田水車

昨年六月旬会での小松園氏の柳話「学生とお世辞のところで枯木も山のお話はあるので、このこと」これに似たような話があるので紹介すると、当地名古屋の生んだ政治家加藤高明氏が時の政友会総裁であった時分、名うての無口に側近が気をもんで、

「総裁、人に会われたらたまにはお世辞の一つも言うて下さい」と注意のつもりで進言に及んだので、その後のある日総裁を訪れた某有力者に向けて開口一番、

「君、まだ生きていたのか」とやっってしまったというのである。

因みに氏は明治、大正期の政治家外交官と

して有名であった。その銅像が当地鶴舞公園内に建っていたが、戦時中例の金属供出で今は台石だけが残り「加藤高明君の像」の銘板だけが妙に時流にけむらげである。

川柳大学のこと、宮武外骨著「川柳語彙」の末尾で川柳小学、川柳中学、川柳大学の欄を設けて、それぞれ適當する古川柳を挙げ、この解答を求めている、大学級になるとさすが難解中の難解句ばかりで、これを完全にマスターすれば先ず古川柳に卒業するわけである。挙げられた句が適不適は別として、これは古川柳研究上まことによき企てであるばかりでなく、川柳に志す者としてその成り立ちにも少し関心をもたせる上に於ても必要なものであるようにおもえる。右の語彙を散逸してしまつて、以来発見に心がけているが古本屋にもなかなか現われない。

何の文章であつたか、書きもらしたし、また失念してしまつて申し訳ない次第である。以下はそれに拠る記録である。

最多人名ベスト・テン(日本全体的)

- 1 鈴木 200万 6 高橋 80万
 - 2 佐藤 190万 7 小林 75万
 - 3 田中 130万 8 中村 70万
 - 4 山本 90万 9 伊藤 70万
 - 5 渡辺 85万 10 斎藤 60万
- 以上でみると、相当ありふれていると思つていた筆者の吉田などはまだまだ資格がなささうである。

川柳塔社常任理事会 (48・12・4)

四八年度最後の常任理事会が本社階上で開かれた。

郵便物滞貨で、まだ十二月号を手にしていない人がいた。(三十日に発送したが生野局区内に十六日着便。タクシーで十分間の地点である)

集つた人は、若本多久志・戸田古方・中島生々庵・西いわを・本多柳志・橋高薫風・大坂形水・金井文秋・不二田一三夫諸氏。

主幹お心づくしの日本盛が卓上をまわる。そんな雰囲気の中で、きびしい世相ではあるが、四九年度への飛躍を誓ひ合つた。これには同人諸氏の絶大なるご協力が必要である。社を動かすエネルギーは同人諸氏の川柳愛いがい何のものもないのである。ご支援のほどを。

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 〇三五四一―四

夜間 〇四四〇八

初歩教室

題「閑」

本田恵二朗

私は劍聖宮本武蔵の誕生地である岡山県北の大原町に呱呱の声をあげた者だが、現在同地に武蔵神社が存在する。私は次の句を生んでいる。「武と文を両立させて神となり」文武両道の天才の書に有名な「五輪の書」がある。その中に次の一文がある。

「道は己の中に在る。心の支えも己の中に在る。夫れは只烈しく厳しく逞しく道を進む中にしれない。」この一文を熟読玩味するならば、それは人生行路のあらゆる部門に通用する至言である。私は解釈してゐる。我々が歩き続けている川柳街道にも、びたりと当てはまるものもある。そこで、私が柳友の句をつついたり、アドバイスしても、その句は所詮借りものに過ぎない。つまり本ものではないということになる。結論を急ぐなら、自分自身の句を創るより外はないということになる。本ものの句即ち自分の句を創れる川柳人になるべく不断の精進をしようではないか。

柳恩に恵れ閑日など知らず

右近

柳恩という言葉はこの私が創ったものだが右近氏がそれをよくおぼえていくれたこと嬉しく思っている。然しこの言葉は一般社会に通用する言葉ではない。川柳の仲間だけに理解してもらえる言葉である。これが一般社会に通用するほどの川柳普及がなされたらどんなに嬉しいことかと思う私である。尚この一句には、恵の一字もあって、その内容も私が頂いた句と解釈して、有難くうれしく頂戴しよう。

右近

閑をみて編んだと母の手紙添え

右近

(閑々に編んだと老母の添え手紙)

サヨ

老じやとて連休留守番古鳥

つとむ

(老いの閑またまた留守番たのまれる)

志津

閑散の社長碁打ちに呼びつける

ますえ

(閑散社長今日も碁盤に呼びつける)

好一

閑人が押しつけられた町の役

陽山

(街の役押しつけられた町の役)

無人

爪染めて有閑マダム自慢する

同度

(爪染めて有閑マダムになりすまし)

同度

閑散の社長碁打ちに呼びつける

同度

(連休のビルの谷間で啼く閑古鳥)

本蔭樺

親方の家計案じる閑つづき

同

職退いて閑もしんどいものど知り

貞祐

(定退が閑とはしんどいものど知り)

同

忙しい人に閑な時来いと誘われる

大成

(閑なとき来いよとせわしげに言われ)

同

閑居して病院通いに日がつぶれ

静泉

(閑居鳴呼病院通いで日をつぶし)

同

お茶席の閑談ここの物価高

同

人生論ハテナのこのうのと閑談義

同

閑人が隣の閑をあざ笑ひ

同

閑できた時老いていて金もなし

同

(閑が出来たら老いていた金もなく)

同

同

同

同

同

同

同

同

伊津志

同

同

同

同

同

大萬川柳

「結末」

入選発表

選者 川村好郎
入選 四十四句

真沙子
堺 真沙子
結末に待ったをかけた視聴率 一二三

堺 真沙子
結末も出会いも同じ橋の恋 一二三

笠岡桃里
下駄一つ流して映画完結す 宿毛窓花

奈良雀踊子
結末へ師走の風が苛立てる

松原史好
結末はやっぱり庶民泣かされる

大阪清女
大物に疑惑残して捜査幕

香川酔夢
考えぬ結末同棲時代とか

門真鉄児
結末はどうなるうとも火の女

兵庫可住
結果から見れば若さの血がさせた

富田林花梢
結末が金でなかった安らかさ

富田林花梢
結末にピエロの顔になっている

鳥取無閑
結末の手打ちの酒で又もつれ 尼崎利美

平田代仕男
出すものを出さず結末つけたがり

大阪弘生
インフレの結末政府どうする気

倉敷里風
原作では死なせドラマでは添わせ

東大阪弥生
美しい結末冷えた茶がうまい

神戸牧人
結末を素直に神にすがるなり

結末のあと女の部屋冷える

結末の犠牲となって辞表書く

大阪好一
結末はいずれにしても金が要り

倉敷翁童
結末は明日へのばす酒と取り

結末はあっさり左遷だけで済み
無理矢理に義理で結末つけられる

倉吉弘朗
結末はナゾのまんまの金大中
結末は大統領の首が飛び

大洲眺明
燃えている二人結末考えず
恋の結末男が泣いている

大阪緑水
結末はこらと読んでいた労使
結末をつけに来たなと見破られ

和歌山 太茂津
結末は神のみが知る道を行く
全力投球結末は考えず

倉敷春日
割り切ったはずの結末愚痴となり
結末を美しく舞い紅葉映え

大阪野迷路
結末がどうあろうとも現職あり
結末が出ぬまま労使に朝が来る

富田林花梢
結末は脇鉄砲の痛みだけ
傷心をその結末が抱いてくれ

笠岡古庵
また意地が出て結末が後退る
結末はついても心に残る傷

西宮百酒
結末を逆に辿ってみる未練

鳥取豊生
人ノ句

結末を聞けば結末ついていず
地ノ句 富田林 弥栄子

結末へそなえた胸の非常口
天ノ句 松原史 好

正座して今日は結末つける肚
選者 吟

昭和三十八年度
ベストテン決定

(梅里賞)
一 藤岡花梢 二四、五 富田林
二 木村弥栄子 二三、〇 富田林
三 宮西弥生 二三、〇 東大阪
四 藤井一二三 二二、〇 堺

五 飛田好一 一九、五 大阪
六 谷垣史好 一八、〇 松原
七 金井文秋 一七、五 大阪
八 小野克枝 一五、〇 倉敷

九 三井醉夢 一五、〇 香川
一〇 久下真沙子 一五、〇 堺

(残念賞)
一一 笠原吸江 一四、〇 藤井寺
一二 小浜牧人 一三、五 神戸
一三 松下梁水 一三、五 倉敷

一四 大路美幸 一三、〇 八尾
一五 森田カズエ 一三、〇 郡山
一六 河股緑水 一三、〇 大阪

一七 西出一栄 一三、〇 大阪
一八 高木桃里 一二、五 笠岡

- 一九 竹内 翁童 二二、五 倉敷
- 二〇 岩井本 蔭棒 二二、〇 奈良
- 二一 野村太 茂津 二二、〇 和歌山
- 二二 傍島 静馬 二二、〇 宝塚
- 二三 能登原 白水 二一、五 倉敷
- 二四 島居 百酒 二一、五 西宮
- 二五 堀江 芳子 二一、五 島根
- 二六 玉置 重人 二〇、〇 大阪
- 二七 仲 どんたく 二〇、〇 神戸

昭和四十九年度第二回
「新調」 五句以内
締切 一月二十日

第三回

「プラス」 五句以内
締切 二月二十日

投句先

〒533堺市堀上緑町一の三の七
藤井一二三方
大 萬 川 柳 係

第二十一回大萬川柳大会

日時 昭和四十九年二月二十四日(日)午後一時

会場 大 萬 (大阪市阿倍野区松崎町三丁目)

会費 三百円
司 会 西田柳宏子

開会の辞 若本多久志
祝 辞 西尾 栞
柳 話 中島生々庵
謝 辞 松江克美

昭和四十八年度ベストテン表彰
兼 題 「新 築」藤岡 花梢選
「繁 昌」木村弥栄子選

席 題 二題(当日発表)各題三句・選者・谷垣史好、金井文秋
「親ゆずり」宮西 弥生選
「負けん気」藤井一二三選
「達 筆」飛田 好一選

閉会の辞 菊沢小松園
ベストテンご招待懇親宴

投句のみの方は百五十円。(郵券可)各題別に柳箋または便箋に記載の上三月二十日までに左記へ送って下さい。
〒252高石市高師浜三の五の六
川 村 好 郎

主催 大萬川柳会
後援 川柳塔社

* 年がかわると話題にのぼるのが大萬川柳大会である。あの顔、あの人がこよなくつかしい(不)

明けておめでとうございます

季節料理・折詰



大阪市阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼生々庵主幹は一月五日朝九時五分からのNHKラジオ第一放送「老後をたのしく」の時間に、歌人の木俣修氏、俳人の楠本憲吉氏と「新春を詠む」と題する座談会に川柳人として出席、三人鼎座の対談を放送。

▼八木摩太郎句碑除幕式が12月2日午前10時から仁徳御陵前広場で盛大におこなわれた。なおその記念句会には午後1時から堺市歯科医師会館で開催、盛会だった。さらに6日の本社句会は何碑建立記念句会として本社が主催した。句碑建立には朝日、読売ほか各紙が大きく報道された。

▼故垂井葵水氏追悼句会が11月21日に和歌山市小松原六ノ一の垂井ホール(川柳わかやま吟社)で開催、故人を偲び大阪から生々庵主幹・好郎・小松園副理事長ほか多数出席、盛会だった。北夢之助喜寿・折笠玲雨・栗田九十九還暦、関谷栄郎句集出版合同祝賀句会が11月23日新潟市大和デパート7階文化ホールで新潟川柳文芸会が主催。選者は右四氏。祝辞に阿達義雄先生講演は下村梵先生。

▼こだいら通信(奥津啓一朗氏)第八号は昭和六年の「川柳の社会観」から昭和十三年の「佐世保川柳」までの川柳年表を紹介。労力的な仕事である。

▼橘高薫風句集「肉眼」を新刊紹介として「ますかつ」と12月号に大森風来子氏「芽」12月号に逸見灯竿氏「それぞれ適切な文章で書いておられる。

▼八木摩太郎著「心ふるさと」は堺を愛する氏の熱血の文章が読者に深い感銘を与えた。(非売品)

▼番傘創立65年記念出版「岸本水府川柳集」文庫本二四〇頁・総句数二五二三句・定価四〇〇円(送料八五円)

▼第20回岡山地区クラブ文藝化川柳大会が12月8日因鉄クラブ2階で開催。浜田久米雄氏は兼題「孫」の選をされた。

▼第五回大和タイムス川柳大会は1月29日10時から奈良県労働会館で開催。題は「芝生・髪・動く・ロビー・朝・歩く・結婚・自由吟・席題二題・各題三句。主催・大和タイムス社。

▼尼緑之助氏(出雲市)からの山陰通信によると島根県芸術文化祭の川柳には金賞「妻が一步わたしが一步賞がつく」大峠可動氏が、銅賞「救援の水ありがたく重いこと」中川晃男氏が獲得され本社同人の大活躍が目立った。また48年度の川柳塔賞に輝いた堀江芳子さんの祝賀は一月十五日出雲市の新春句会に開催。

▼西出一栄さん(大阪市)の金婚祝賀句会が一月二十日(日)午後二時から生野区勝山南一の光明寺で南大阪川柳会主催で開催。ご夫君甚吉氏も元は川柳家として活躍されたが、ご本業の

奥様ともども教員としての永年勤続の表彰を受けられた。また東京ユーモアクラブの方々の訪問を受け、結構川柳のほうも多忙の由。

▼小浜牧人氏(神戸市)の路郎賞記念句会が十一月二十五日に明和川柳研究会主催で開かれ盛会。また48年度の神戸市民川柳大会で「永劫の絆を墓碑の朱に刻み」が第一位に入選。

多忙から一栄さんに二人分川柳してもらおうという夫婦愛は有名である。

▼伊藤茶仏氏(小松市・川柳わかまつ主幹)は近詠の選に情熱を燃やされているが、巻頭の句帳で山上千太郎氏も健吟を吐いている。

▼村田飄太氏(守口市)のまるべに川柳会では12月2日から二週間、社内で川柳展を開き特別出品の路郎・葎乃・生々庵・好郎先生の作品が大好評だった。

▼若本多久志氏(西宮市)は11月2日浜浜市川柳の指人ホーム長浜荘へ川柳の指導講演に行かれ、初歩の人たちにも大きな感銘をあたえられた。また「けいさつ」の友の川柳漫談はますます快調である。

▼野浜奇童氏(岡山県)は

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
 ☆食後すぐのものが効果的です
 ☆くわしくは医師や薬局・薬店で



タケダ

本社十二月句会

会場 以和貴荘

六日 午後六時

昨年の師走句会とちがいが、物価高騰による物情騒然、なにか気ぜわしい句会となった。生々庵主幹の柳話は摩天郎氏の句碑建立委員長として感想をのべられ、氏によるこびをそのまま代弁された。

主幹ご自身、今年各地の主なる大会に出席、医博柳人として健康を自賛された一とコマもあった。緑之助氏と摩天郎氏の句碑、古方氏と薫風氏の句集刊行とよるこびがつづいたが、垂井葵水氏の交通事故は痛恨きわまりない嘆きとなった。と――。

榮氏によつて千寿子夫人と野村太茂津氏が「川柳わかやま吟社」の灯を絶やさない決意であることを報告された。

今月の月間賞は有信新之助氏が獲得、これで本年二回目なので永久保持となる。

ささやまの永尾英断氏が出句はされなかつたが顔を見せてくださった。垂井千寿子さんのお元氣さに何よりも安心しました。

(進行・高杉鬼遊)

出席―与呂志・新之助・古方・野迷路・多
久志・花梢・喜美子・緑水・生々庵・柳志・
美幸・太茂津・千寿子・文秋・素郎・千万子
・一舟・いわを・維久子・一三夫・肖二・綾
女・瓢太・喜風・儀一・牧人・敏・いさむ・
葛城・静馬・俊夫・吸江・勝晴・鶴声・六竜
子・雀踊子・好郎・摩天郎・岳人・茂美・醉
々・一二三・頂留子・つき子・恒明・小松園
・あいき・鬼遊・凡九郎・榮・弥生・庸佑・
英断・葉子。

席題「包丁」 西 いわを選

包丁をもたされおんな妻となり 美幸
うどんやの包丁に蒲鋒浮いている 静馬
包丁を逆さに持てば凶器めき 吸江
包丁がやんだら母が起しに來 俊夫
砥石まで添えて包丁嫁に継ぐ 喜風
ぎつちよでも器用にむいた柿の皮 瓢太
ままごとの包丁未來の夢そぞで 維久子
庖丁のリズムにハミングうかれ出る あいき
包丁もあくびしているひまな夜 好郎
包丁の音もう食欲の病上り 千万子
包丁の音女房に何かあり 吸江
よく切れる包丁だから敬遠し 喜美子
庖丁さばきも鮮かに活き造り 瓢太
庖丁のリズム昨夜は荒れたらし あいき
玄關のチャイムへ包丁持ったまま つき子
交骨のおやじの包丁冴える客 新之助

包丁の峰にもあつた使いみち 文秋
値上がり分だけ包丁小さく切る 醉々
包丁も切れなくなつて倦怠期 瓢太
包丁もうれしい音で良い話 敏
包丁に命をかけた高い下駄 敏
包丁を購うに堺まで出向き 鶴声
出羽一丁ないのへ祝いの鯛が來る 鬼遊
旅たのし女包丁忘れさせ 維久子
包丁を持てば冷たい顔となる 花梢
包丁のリズムも母と娘で違い 柳志
どんな包丁かテッサの薄いこと 好郎
まな板の鯉は包丁待つ姿 一三夫
包丁の切れ味冬の音がする 花梢
素人の包丁鯛を引きちぎる 恒明
母の日の包丁父の腕が冴え 葉子
包丁の水切つてから夜食にし いわを

席題「建つ」 野村太茂津選

借金をしたとは見えぬ家が建ち 雀踊子
アツト言う間に再建開店ビラが來る 凡九郎
建売のローンすむ頃壁が落ち 喜風
小商人殺しのスーパ―建つうわさ 一三夫
日照権啖つて高層ビルが建ち 俊夫
お隣りが家を建てるに判がおり 吸江
棟上げもなしで犬小屋建てられる 文秋
倉も建つような話に乗せられる 多久志
建てるプラン貯金追つきそつでなし 恒明
はめらきローンで建てたとも言えず 葛城

建つまでは生きてて欲しい子の願い
借るだけ借りて立派な家が建ち
道するべ黙って建てて山に生き
作家並印刷本堂建てかえる
飲みさえしなければいままごる建ても
マイホームローンで建つころ社
日照権入権地下濠でもほろか
計算機の上ではとくにビルが建ち
ビルなんぼ建つても空はまだ広い
マイホーム建つまで生命持つかしら
建ちのきへ金で買えないわけを持ち
建つ筈の田から最後の米がとれ
家が建つどころか土地に手が出せず
いつ建つか夢見てしなきマイホーム

素郎 勝晴 一舟 醉々 素郎 一三夫 凡九郎 花梢 緑水 静馬 維久子 文秋 多久志

マイホーム銀行の方へ倒れかけ
田を売った罪滅しに家を建て
断崖に僕の句碑建つ石さがす
建て売りのような夫婦で家を建て
守られぬルールへ建て増す留置場
建て増しをしてからひまな小料理屋
高く建つ鉄筋長屋というマンション
焼け肥りと誰にも分るビルが建つ
建ててから妻がいらいらしはじめる
灯を下げて建てる吾家の青写真
家建てる金は貯めたが土地がない
建てるどころか育ち盛りに日を追
真向いに建つたビルから覗かれる
建立は某女地蔵のよだれかけ

一舟 葛城 岳人 千万里 六童子 好郎 頂留子 新之助 与呂志 六童子 儀一 静馬 肖二 醉々

川柳塔柳箋

円 70
価 送 70

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック



積水化学
本社 大阪市北区宗道町1

建て増した隅に万年青の実が赤い
野菊摘む建前の日に生けたくて
太茂津
席題「古稀」
竹中肖二選

古稀祝うもちがつまったハブニング
まだまだと言う七十の空威張り
世が世なら隠居したかる古稀祝
これが古稀かいな童心失わず
古稀秘めて男は男の酒の味
頭髪の黒が自慢の古稀祝う
七十を何と呼ぼうと野良に生き

川柳研究社

123 東京都足立区梅田三十七一五
振替口座 東京 五六三七一番

ベレー帽かぶって古稀の未だ若し 牧人
 古稀をまだ若く明るい詩を綴る 太茂津
 古稀なんぞこれから一旗挙げる意気 飄太
 勳章の噂も出だす古稀となり 吸江
 古稀だとは思ふものなし二人連れ 酔々
 かくしやく仕事に張りを持って古稀 文秋
 山もあり谷もあったと古稀の弁 美幸
 平均だけ生きたを古稀と祝われる 文秋
 ひたむきに唯生きてきた古稀万才 美幸
 古稀を生き米寿へ希望おきかえる あいき
 古稀に立つ一人人生心豊かなり 岳人
 平均寿命に越されて古稀は死語とも 飄太
 ありふれた古稀へ感銘湧いて来ず 綾女
 古稀だなどと思う日もありペンを置く 好郎
 古稀を未だ人間未完と言う私 六童子
 古稀の胸今日は主賓というリボン 千万子
 米寿から古稀が聞いてる長寿法 吸江
 古稀の母長生きしてねと守さされ 静馬
 本妻も二号も仲良うなつて古稀 素郎

兼題「裏」

村田環太選

六法の裏を学んだ知能犯 一栄
 裏に凝る着物日本の味という どんたく
 老夫婦裏も表も知りつくし 正朗
 裏金の効果ダルマに目が入り 軒太樓
 觀光へ裏街道になる不運 芳子
 雨呼んで葉裏で憩う雨蛙 章雅
 男勝りの蔭に哭いてた母の裏 日満
 会いにゆく暗着裏地の紅が燃え あいき
 裏門は得休がしれぬ出入客 いわを
 口裏をあわせそねた飲み仲間 与呂志
 種子も仕掛もないハンカチの裏表 六童子
 吐きすてた言葉の裏をひろう妻 雀踊子
 縁の下の力持ちだと裏話 茂美
 もう誰も話さなくなつた月の裏 恒明
 裏窓のネオンが眩し針仕事 美幸
 待ちぼうけ互いに駅の裏表 吸江
 女一人険の裏の過去を追う 千万子
 赤い爪男の裏を見抜く夜 維久子
 寡婦の血のたぎり裏地の紅に生き 一二三
 にせ物でないから裏も見てもらい 雀踊子
 裏表ある人だから距離を置き 文秋
 三十年そつても女は裏を持ち 喜美子
 次郎長にOPPイがある舞台裏 勝晴
 ごゆっくり心の裏と気がつかず 好郎
 冷やかな言葉の裏にある意味 静馬
 人をもう信じたくない裏話 文秋
 裏話正邪は知らず耳を立て 小松園

兼題「はったり」

山本素郎選

その日ぐらしに裏も表もあるもんか 静馬
 札束で裏をたたけば軽く開き 鬼遊
 肚芸の火花を散らす舞台裏 牧人
 裏かいたつもりが裏の裏かかれ 飄太

はつたりの刺青萎えて孫を抱き 一栄
 はつたりをアゴで使っている男 正朗
 はつたりが利かぬと知つた声が落ち 宗義
 遺言にまでハッターリを効かせとき 多久志
 はつたりの始末は親が自腹切る 綾女
 はつたりの演技が板に付いて居ず 儀一
 はつたりを利かすオンシャレもただなり 静馬
 口から出た瞬間はつたりとなる言葉 凡九郎
 ホステスの目にはつたりは映らない 緑水
 はつたりをすんなりきいてくれる友 酔々
 はつたりのきかぬコップの底に砂 岳人
 はつたりがもう限界に來た赤字 好郎
 はつたりのない青年の主張よし 酔々
 ハッターリの英語へ外人「コンニチワ」六童子
 はつたりも素直に聞ける酒の席 維久子
 はつたりの男が好きと言う女 肖二
 インフレへはつたり追っつけなくと 千万子
 石橋を叩きはつたり寄せつけず 喜風
 はつたりに見抜いて知らん顔の妻 千寿子
 はつたりの割に度胸のない男 花梢
 つつ抜けと知らずはつたりまだ喋り 好郎

はったりのきく剃りあとの青を撫で 栞
 はったりのカード一枚伏せている 牧人
 はったりののは字も見せぬはつら屋 野迷路
 うしろから見たはったりの細い首 俊夫
 丁々発止はったり同士金がない 一三夫
 はったりとわかる話を平気でし 与呂志
 はったりが効きすぎチップはず破目 好郎
 ハッター屋小さな街をそと出る 鶴声
 はったりと知らず善人正座する 弥生
 親の欲つい はったりが出てしま 素郎

兼題「八方塞り」 戸田古方選

八方塞り最後の石を取り上げる 宗義
 八方塞り追い詰められてからの僕 正朗
 八方塞りどころか双生児儲け 芳子
 八方塞り蠅の動きへしやがみ込む 日満
 八方塞りの身で大胆な新事業 誓二
 気がついて見れば裸の王様か 日満
 八方塞り今日の自分を見失い 好一
 八方塞り易者にみせてまた迷い 吸江
 塞がれば無神論者も鈴を振り 美幸
 夜逃げする家も二号も押さえられ 一二三
 地下足袋に八方塞り知らぬ泥 岳人
 ふんずまり一度は夜逃げも考える 多久志
 北風に八方塞り笑われて 岳人
 当分は八方塞り石になる 緑水
 八方塞り本尊だけが信じてる 太茂津
 蟻の一穴ということもある八方塞り 凡九郎

八方塞りへ酒など飲みなはれ 素郎
 八方塞り真っ白いハンカチ目が痛い つき子
 八方塞りなのに信用してくれず 季賛
 八方塞り八卦当るも当らぬも 幸太郎
 猫にまで八方塞り腹を立て 緑水
 八方塞り妨げまいとする若さ 与呂志
 八方塞り糸口見つけている焦り つき子
 易の灯は八方塞りとまで言わず 素郎
 八方塞り悪魔のささやき耳を貸す 恒明
 八方塞りあと一月で春が来る 維久子
 茶柱も立たず約手はまだ落ちず 柳志
 八方を塞がれ龜は石になり 葛城
 その時の捨て身八方塞り霧散した 凡九郎
 八方塞り忍者になつてみたいもの 敏
 住み馴れて八方塞り気にしない いわを
 運勢はまっ黒動かずにいれと言 飄太
 八方塞り頭下げれば済むものを 喜美子
 八方塞りのない王様はあくびする 美幸
 八方塞りそれでも働け陽のぼる 俊夫
 八方拡がり八方塞りかもしれず 古方

兼題「番号」

川村好郎選

番号はピツタリ組番違つてた 飄太
 番号を貰うて永住権を持ち いわを
 番号のないのが裏口から這入り 俊夫
 宝くじ一字違いは見せまわり 太茂津
 足に番号つけた初孫見せてくれ 吸江
 買溜めも番号順に並ばされ 好一

当りそうな番号などと夢を抱き 文秋
 病室の番号たどる見舞籠 六童子
 何番さんごあんないとは失礼な 太茂津
 人気など馬は気にせぬ背番号 鬼遊
 十二月夢の番号しかともち 栞
 番号の順に試されるモルモット 小松園
 番号はラスト入試はトップナリ 一三夫
 おれの金出すのに番号をつけられる 敏
 病室の番号きいてまだ行かず 栞
 集印帳飛び番で行く札所 頂留子
 番号で呼ばれる女囚の目がうつる 雀踊子
 番号で母につながる保育室 新之助
 番号を忘れ団地をまださがし 好郎

(河井庸佑・整理)

満十八才になりました

北川春巢指導

城北明朗句会

故田中多幸
 故谷沢源川
 故柳生柳生
 故大西為二
 故岡部シゲ
 故垂井葵水



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

川柳東大坂

竹中肖二報

夫婦今倦愈期です鉛色 竹中肖二報
 ところろに溶けて鉛は型に添い 好一
 捨てきれぬ都会は今日も鉛色 柳信
 そつと剃がして賞与の中味たしか 俊夫
 剃がされて剃げてすなおにまだなす 古方
 じわじわと可愛い女に剃ぎとられ 儀一
 剃がされたメッキがそつと座をはず 酔々
 シグナルを持たぬタイプのをする 悦郎
 良妻のつくるタイプになる男 雀踊子
 鏡見てから好みのタイプ言つてはし あいき
 特訓の汗がピンチに甦えり 柳宏子
 働いた汗太陽をはねかえす 凡九郎
 汗だくへ妻のサーピス行き届き 喜風
 善人の言いわけ汗を拭きながら 文秋
 汗かいて飲む茶のうまさも日本人 鶴声
 勝利投手の汗をマイクが追ってくる 三十四
 倅せは今日も達者な汗をかく 肖二
 投げやりの妻へ夫の几帳面 綾女
 母さんの投げやりを娘らが真似 季贊
 投げをパパが仕上げたプラモデル 一栄

堺・若芽合同川柳会

和海草春報

天気図の流れ変らぬ高気圧 育二
 或る時の女気ままに流れたし 肖二
 十指みな流れて俵わせつかめない 夢成
 光ある限り灯籠流される 草春
 ない袖も振って通した若い頃 柳信
 振り向いた顔がスタイルぶちこわし 清女
 ない袖を上手に振って議員さん 柳影
 幼稚園首の振りよう皆ちがいで 天笑
 てらと振られたショックまだ消えず 子笑
 雨傘を傾け避けたのも見られず 儀一
 いつしかに傾く暮情秋ふかわれ 宏子
 ベンペン草傾く屋根にしがみつ き 静馬
 傾いた気配を母に教えられ 痴
 あの時が一番良いと思ひ出し 藤持
 恍惚の意味が時勢でちとかわり 摩天郎
 忘却へ苦しい時が長く過ぎ 誓二
 温室の花で時節を知らず咲き 青香
 待たせてる方も何度も見る時計 千万子
 他人の恋横から見てた待ち時間 天笑
 たてに首振る時ばかりで無い女 小松園
 和歌山七面句会 中筋三幸報
 胸襟を開き話すと酒に酔い 光治
 ふる里に娘の無事祈る母が居る しずえ
 出獄の不安に遠い雪の故郷 其夕
 かの人を胸にしまつて角かくし 清和
 ふるさとまで電話開通母の声 淳次
 ふる里に来てまで公害知らされる 淳子
 ふる里の友の年賀も子に代り 政夫
 目の位置に裸婦像の胸隆々と 凡夫
 童謡のふる里は早や消えうせて 栄

佳句地10選 (前月号から)

大坂形水選

ある出合い笑って別れようかとする 智子
 断絶の芽ばえ小さなうそがふえ 一舟
 騒しい奴だと顔をみてただけ 三幸
 睦まじく枯れた夫婦の見事なる 本蔭樺
 友情は家内ぐるみで深くなり 聖地
 チエックされた港漁民の明日がない 肖二
 神様がピンチの度に呼び出される 鬼遊
 休耕田人の心も荒らされる 東光
 ロッカーの中で出張してた嘘 岳人
 その次の青信号で渡る年齢 榮

ふるさとを捨てた心のデスマスク 芳童
 一日一善とふる里の揭示板 ふく代
 ライバルと知らずに話した胸の内 富子
 逢うた夜はブスツとして帰り 太茂津
 ふる里に母をのこしたチャンピオン 三幸
 城北明朗句会 川口弘生報
 七人の敵へラッシュに押しこまれ 春報
 ラッキーセブン積乱雲が笑つとまり 静歩
 七夕へ筆を持つのも久し振り 鉄児
 七十オポルノ映画へ手をたたき 三十四
 ライバルが居ないから七夕の恋続き 弘生
 洋服でとても可愛い七五三 志津
 七福神皆それぞれのお顔して つね
 七十を鼻たれ小僧という強気 繁子
 七十の空へ公害を憤り 太茂津
 七転び八起きダルマ手は見せず 生仏
 信頼をザイルで結ぶ山の友 満津子

戦前は戦時中はできらわれるヤスエ
新聞社自社の値上げは記事にせず 賛平
金婚式すまして次は米寿待つ 秀村
あわてん坊ゆつてクリズムに乗遅れ 濁水
亡き夫のサツキ今年も赤く咲き晴子

川柳大坂 児島与呂志報
黙認が少年Aを狂わせ 笑風
頂いた鮎も一緒に入れてやり 徳松
頂上を極めて空と対話する 敏
口こそ出さねど兩人許し合い 誓二
触れ合う心が眠れぬ夜となり 重人
また一人悪友の住所録へ斜線 三十四
グラマーが近くに満員苦にならず 漁人
そこに居る妻次々と探す用 秀峰
鈴虫の横でへちまの苗を売り 一乃字
先着はひと風呂浴びた顔で出る 本蔭棒
胸と腰おんな女の線で立ち 洛醉
新婚は風邪をひいても冷笑され 徹舟

矢印が役にたたない地下の街 武松
十字路の矢印たつて気まま旅 道子
矢印の道順通り歩かされ 季賛
陣笠の数で大物評価され 楽々
食膳のうなぎ女房の下心 力歩利
大物を探せば雲の峯に居る 力泉
良心の疼きのままに秋しずか 与呂志

川柳たけはら 森井善居報
飯盒すいさん如何なる武器も許すも 静水
休養認む医師すらすらと診断書 房子
ローソクの影は涙をふく所 笑子
定石の通りに相手打って来ず 文晴
悠久の思いは果てず雲の峰 紫光
月賦完了次を買わねば淋しくて 蘭幸
新築の上見栄も買い揃え 貞子
けむりさんどうしてあなはは いと
無花果がクワツと口を開けて秋 菁居
教育ママさうもいかな職を持ち そのみ

一分の柳論

川柳の雑誌や句会で行くから考えてもわか
らぬ句を見受けられるのがふえて来た。こ
れは革新とか前衛とかいう部類に属するも
のらしく伝統を護っているのに対し名付け
られたものだと思う。このことについて考
えたり話し合ったりしたこともあるが、わ
からぬ句は無理をして読まぬ聞かぬこと
にすればよいではないかという意見も出てい
た。ところで思ひ出したのが路郎先生の句
人生は悲しからずや左派と右派 路郎

浜田久米雄

である。世の中には右があるから左があ
り、その証拠に書道、華道、絵画にも右派
と左派があることで、字や花や絵の話を通
けば、見る人が自分の思うように解釈すれ
ばよいそうだ。けれども剣、柔、弓道には
前衛は見られない。川柳の伝統を護るとす
れば、先生の句を思い浮かべて、むしろ「
悲しからずや」を「うれしからずや」位に
考えて割り切った心になる余裕を持つこと
にしたのである。

羽持たぬ幸せ踏んばることを知り 一路
戦力を持たない誓い 第九条のばら
山百合のごと過疎地に咲いた女 故
類杖もたのし野心と思ひ出と 雅鳳
干天の慈雨にも似たり母の文 不
日めくりへ日本の秋の短かすぎ 英詩
未来図は流れに任ず物価高 鬼焼
子の組でプランなるほど要るお金 西合
婦人科でバツタリ郷里の友に逢い 淨美
ボンノウが太い己れでもて余す 葵水
四五日の留守へたまっていた用事 凡女
川柳ささやま 河原みのる報
欲張り爺犬先頭に掘りたがり 松堂
掘り出しと言われるほどの腕の冴え 村雨
専門を取れば子供のような人 喜美代
世界平和スリリの専門家が揃い 可住
婦人科医に委せ産声だけを待ち といんぼ
未練ないことまで着せたり子沢山 みのる
やりくりも教えて帰す里の母 越山
やりくりをほめて貧乏惜しがられ とも子
惜しむらくも我流初段で行き詰まり ひか平
我流だが個性が生きてきた五十 英断
鈴成りの柿食欲に見放され 宗珠
枝豆へマニキュアの手もせわし 近江
男の子三人育つ 秋の膳 とおる
マダムの座客の傷を詫びて住む 百合子
もめ事の客へマダムの如才なし 無鬼
八尾市文化祭市民川柳大会 鬼遊報
身を飾るただ一枚のハンカチで 葵水
親分と呼ばれ財布の軽い夜儀 一
女手にあと一息の子の育ち 女

国旗掲揚人は何をか祈らねば
 黒板で後が見えるように言い
 神の書くドラマはわれに泣けとい
 おつり一円クダサイ僕は親分でない
 紅白の旗敵も味方もない園児
 山の峰山の男が来て飾る
 ボーナスを一回ふいにした晴着
 天高く広場は平和にうたい出す
 果てしなき海へロマンの旗を立て
 惚れているから女耐えている
 夏休み黒板長い佗び住まい
 駅前の広場に落し穴がある
 話せる時の母は女の匂いする
 ドラマチックな女見果てぬ夢を追う
 黒板を叩く師の鞭あたたかし
 赤旗林立平和を願うとも見えず

智子 采夫 美幸 花梢 岳人 吸江 緑水 弘生 喜風 雀踊子 君子 敏子 維久子 柳宏子

謹んで

新春を祝す

たくましい柳魂を
 育てよう

川柳 大阪

大阪市交通局川柳部

柳人一同

どんぐり川柳会 谷垣史好報
 幕開けばばったり止んだ裏話 喜風
 階段へ手摺りを付けて父母を呼び 儀一
 本当のこと聞かされた裏話 いわ々
 丹前のでゅつくり聞かす裏話 酔々
 晴着の娘わたしの心へ風を入れ 岳人
 裏話俺もピエロであつたらし 吸江
 裏話初耳の顔で聞いておくれ 好郎
 階段を背中降りる清掃夫 鬼遊
 晴着きて今日一日を強く生き 水陵
 帰省する夜汽車となつて晴着脱ぐ 弥生
 裏話し聞いて素直に喜べず 史好
 階段教室原子記号の匂いする 史好

南大阪川柳会 金井文秋報
 元美人鑑のよりようまで違い故 葵水
 行きずりの美貌思わず振り返えり 喜風
 尼僧には惜しい美貌を武器とす 多志
 貧しさはついに美貌を武器とする 俊夫
 鼻筋が冷たい顔にしてしま 柳宏子
 ちよつとだけ美貌が欲と良い気立 柳信
 プライバシーわざわざ自分で言 凡九郎
 プライバシー侵さず姑嫁昼寝 形水
 なごやかな寝息のそばの針仕事 好一
 バランスは黒字だけれど金が無い 静馬
 身につつまる話に歩く廻り道 美代
 明日は明日今日の一步を考ふる 好郎
 片足の人かてやっばり歩いてる 小松園
 真黒に焦げて泳げぬまま帰り 滋雀
 日本に家族がなごむよいたたみ 千万子
 ご先祖を迎えてなごむ仏間の灯 一栄
 逆光のモデルで海を走らせる 古方

大阪文化祭川柳賞作品

席題

節約の美德教えた母の背な 玉置重人
 善人の好意善人だけが知り 久保田寿界
 包丁をとく手へ冬が這いのぼる 柏原幻四郎
 湯の町で二泊句帳をもつ夫婦 磯野いさむ
 糾すにも逃げ道一つあけてや 比良井荒助
 本店の知らぬところで金が消え 堺谷伊升

兼題

信楽の里で火鉢が売れ始め 柏原幻四郎
 つけ焼刃教えた人も叱られる 田中南都
 柏手の老婆と稚児と森の風 田口令二
 天国へ行ける橋なら渡らうか 池内雅己
 近すぎて通天閣をまだ知らず 岩垣一点子
 暴風雨の中に毅然と天守閣 堀江としを

大声で失意を散らす海がある 君子
 海のマジック夕陽を呑んじまい あいき
 プライバシー娘は電話に戸を閉める 正彰
 南電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
 開発に美味しい空気どこえやら 八郎
 ふるリンの味へ開発水をさし 儀一
 開発のシヤベル冷たい眼で見られ 喜風
 開発と云う名で業者儲ける気 宏子
 開発のおかげでバスも来てくれる 圭水
 開発に待ったをかけた古墳群 肖二
 開発の日本に賽の河原みる 清水
 開発に神の怒りの鉄砲水 綾女
 開発が汚職をつれて蓋をあけ 柳信
 京都塔の会 松川杜的報

ほととして音羽の滝も秋になり 水客
 変る京見守りつづけて扇石 求茅
 入まばら地苔も緑清閑寺 叩門
 落葉あつめるくま手に秋の音 善信
 清閑寺句座に席なし秋寂し 笛珠
 川柳散歩観光客と歩を合わせ 季贊
 枯れ草も落葉もあって歌碑の道 蘇堂
 ペンフレッドだけで続いた清い中 飛鳥
 鐘楼の下でみつけた蟻地獄 三求
 休日のひまをお寺でひるねする 優子
 靈鳥が飛ぶよに清水の屋根浮かぶ 杜的
 川柳ウイロー社(ハワイ) 林蒼蛇樓報

・ペンペン草・

★あけましておめでとうございませう。本年もよろしくご指導のほどを。
 ★ことしは「どけち元年」になるそうぞ。それもよろしから。
 ★ただこまるのは、儲からない同人誌の運営である。改題いらい、みなさんからの原稿用紙の余白が三四行あれば、それを切り、保存してアナ理め用に使うという、どケチを実践してきたが、もうそんなことではどうにもならないほどの高騰波に押し流がされそうであ

負けて勝つ手あり女の黙秘権
 最初から欺す氣手をかえ品をかえ
 手を焼いた息子に今は世話になり
 手の節に残る辛苦の半世紀
 人柄がそのままここに此の手蹟
 税務署へあの手この手で氣が疲れ
 又同じ手管と知りつついかかり
 手の跡は残れど足跡消えて行き
 手違いに追われ零落度を深め
 手離したとたんに土地の値が上り
 世渡りの嘘が苦が手で細く生き
 手ぐすねを引いて待つとは露しらず

る。(この、どケチ精神をわが家でもやつとれば、ちよつとは、じつと手を見ることもないのだが)
 ★正月そうそうから、こんなジメジメした話はやめましょう。パツと景氣よくいきましよう。
 ★路郎先生が、ばくに「二年できみを酒好きにしてみせる」とおっしゃったとがある。しかし、なんのなんの、今もって酒席にハベルことはほとんどない。その当時、先生によく申しあげた。「万一、トラになつたらどうしますか」である。先生は「そややナ、き

押山 無関係さと手を振って赤くなり 美千香
 雪女郎 秋茄子の漬物これも老母の味 河舟
 椰子郎 うっかりと手を出したけど金たらず 伯雲
 万里歩 手錠だけ見えて犯人顔かくし 稠
 峯 手心をされても勝てぬ下手将棋 七雄
 快夢起 握る手に口では言えぬ心こめ 沙
 三石 手前味噌こねて人から嫌われる 水
 公女 嫁く娘が手をつき無言で涙ぐむ 千枝
 曉舟 老いまた横断歩道手をひかれ 小
 蒼蛇樓 握る手へ一票たのむ小声なり 美和
 北海 幸運をつかんで乗った玉の輿 草
 カ口 握手だけさせてチップの義理がすみ 無口

みがトラになつたら手のつけようがないやろナ」
 ★ばくの知りあいに寅歳生まれが二、三人いるが、みんなおとなしく、ヒツジのぼくの下ウマになつてくれている。エトなんていい加減なものだとおもう。
 ★落語に出てくる寅さんは好人物だし、お寅さんは長屋の金棒引きだ(今はこんなコトバは使わなくなつた)これとて世話焼きの好人物である。

★十年くらい前までは前方からトラが来てても、こつちが一直線に歩いていくと、かならずトラくんは道をよけたものだが、このごろは自分の体力を知っているから、トラがくると逃げることにしている。(一度、正面からぶつかって、ぼくの方が、素つとんだので)近ごろの若いトラはメッポウ強いから相手にしないほうがカシコイようだ。
 ★トラでこわいのは「ジャヤトラ」であらう。こんなヤツにやられたらイチコロである。昨年は交通事故で亡くなった川柳家がうちでも二氏。(垂井葵水氏・古江雅鳳氏)そのほかにケガされた方が数氏。こんな兇器が走りまわる世の中なの

▼葉子コーナー
 ▼元旦に来客の一番が男の方ですと、縁起が良いと子供の頃に言っていたのを思い出します。男の子ですと、持ちきれないくらい、みかん、林檎、すめめ等を母が手渡していただきました。女の子ですと、みかんだけでした。この頃は元旦にそんな話もないうです。
 ▼元旦に来客の一番が男の方ですと、縁起が良いと子供の頃に言っていたのを思い出します。男の子ですと、持ちきれないくらい、みかん、林檎、すめめ等を母が手渡していただきました。女の子ですと、みかんだけでした。この頃は元旦にそんな話もないうです。

本社新春句会

日時 一月七日(月)午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

柳話 川村好郎

☆短冊交換会(一人三点以内)

☆四十八年度月間賞杯授与と全出席者表彰
(今月の出題・児島昌呂志)

兼題 「表紙」

席題 「朝光」

二題 「朝光」

二百円

★投句だけの方は切手50円封入

菊沢小松園選
若本多志選
中西尾多志選
島生々庵選
各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

2月の兼題 「善後策」 「廊下」
「セメント」 「皮肉」

橘高薰風著

句集「肉眼」

送料共 千円

水彩画入り

「古方手書き句集」

送料共 八百円

募集

三月号発表(1月15日締切)

川柳塔(10句) 若本多志選

水煙抄(10句) 北川春巢選

課題吟(各題5句以内)

「緑」 川端柳子選

「放送」 堀江正朗選

「警察」 嘉数千代香選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

四月号発表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵選

水煙抄(10句) 川村好郎選

課題吟(各題5句以内)

「居睡り」 加藤貞山選

「抜け道」 永藤弥平選

「幕」 三井醉夢選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

前月号は30日に発送しました。

定価二百五十円(送料十六円)

半年分 千五百五十円(送料共)

一年分 三千円(送料共)

昭和四十八年十二月二十五日印刷
昭和四十九年一月一日発行

大阪府南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼 発行人 中島蓬太郎

印刷所 太陽印刷株式会社
郵便番号 542

大阪府南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所 川柳塔社

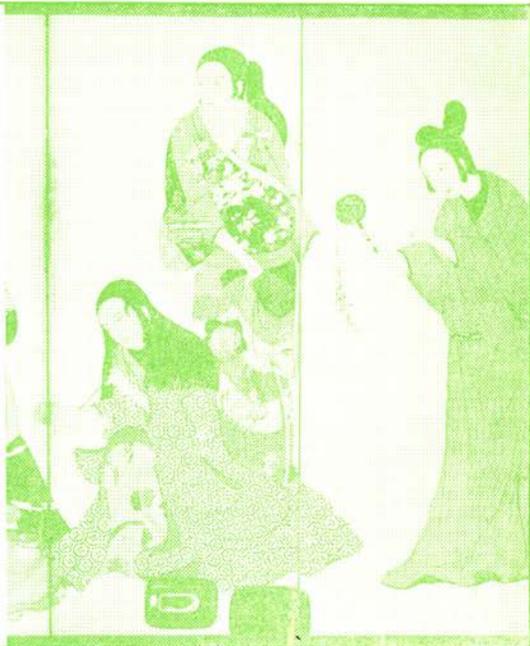
電話大阪・二七一―三三八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は、日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です。
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む、有
数のコレクションです。
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼
焼 餃子
又 焼 饅
売 子 饅

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・な ン ば



TEL 641 0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストアー/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

南海沿線の

初詣



住吉大社
水間観音
高野山

お問合せは
南海国際旅行



南海電鉄

■ なんとば641-8686

■ 梅田311-5038 ■ 天王寺623-1641

一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗



宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・養・御影

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年十二月二十五日 印刷
昭和四十九年一月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻五六〇号

川柳塔

一月号

定価 二百五十円 (送料十六円)